

阿伏兔(不死者)に転生  
したサラリーマンの物  
語

アルトリア・ブラック

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

阿伏兔（不死者）になったサラリーマンが銀魂の世界でドタバタする物語。

阿伏兔に転生。阿伏兔自身が不死者。江華と兄弟（血縁関係無し）の誰得設定。

# 目次

- 第1話『ワケありにもほどがある』  
1
- 第2話『阿伏兔（アルタナ）と江華と神威』  
15
- 第3話『運命の日（吉原炎上篇）まで意外にもやってくるのは早い』  
30
- 第4話『強キャラに身内判定されたら割と生き残れるもの』  
44
- 第5話『強さに固執しない奴ほどめっちゃ強い』  
58
- 第6話『不穏な気配がする中、仕事って  
いうのはしづらい』  
68
- 第7話『不老不死なんてロクなものじゃない』  
80
- 番外編『騒動後に出会おうと会話がしづらい』  
91
- 烙陽決戦篇〜銀ノ魂篇
- 第8話『二人の不死者』  
101
- 第9話『異なる二人』  
111
- 第10話『戦いの最中だって休憩は必要』  
121
- 第11話『地球での戦い』  
135
- 逆転兄妹パロ（1話完結……）
- 番外編『逆転兄妹篇』  
147

最終回後く俺たちの旅はここからだ!!く

第12話『最終回の結末は皆さんの想像次第というというのが一番困る』

162

第13話『お年玉というのは不死者にとつては害でしかない』—— 170

第14話『仕事というのは終わりがあ  
るから頑張れるモノ』—— 180

將軍暗殺篇『くくより強いとか言われ  
たらめんどくさいことになる』—— 186

第15話『敵キャラが努力したら物語  
が破綻する』—— 192

END 『エンドロールのない人生』

# 第1話 『ワケありにもほどがある』

とある大企業の社員として勤めていた男は己の会社のブラツクさに苛々しながら家に帰宅した。

「ああ〜…あんのつくソ上司！少しくらい周り見ろよ！価値のねえモンばかり受け取りやがって…！」

バフンとベットに倒れこむとベットの枕元の近くに置いてあった積み重なった漫画が手に落ちてくる

「イッテ！」

起き上がって漫画を見る

「あ、そういや、今日は新刊が出てたな、確か虚が地球で戦う話だったっけ？」

男が好きなのは『銀魂』であり、作中でもかなりメタイ発言が多く、その年に流行したネタをすぐにパクるものだ。

ギャグやシリアスなネタが交互にあり、男はシリアスもギャグも両方好きだった。特に大好きなのは吉原炎上編、洛陽決戦編だろう。

つい最近じゃ銀ノ魂編だったか、その長編が大好きだった。

「さてと、続きを読みますか…」

読もうとした時、携帯に一本の着信が来る

「ああ?!あのクソ上司か?!」

電話に出ると至急会議に参加してほしいから来てくれと言われ電話を切ると怒鳴りながら家から出る。

歩道を渡った際に青信号にも関わらず車が突っ込んでくるのが横目でも見えた。

「あ、終わったー」

目の前が明るくなる。

「と…阿伏兔」

綺麗な声に呼ばれハッと目を開けると、そこは道路でなく、あの暗い空でもなく  
変な色の空が広がり、寝っ転がっていた場所は砂場だった。

「……へ?」

仰向けに倒れており、そこを覗き込む人物が見えた。

「派手に頭から落ちてたが、大丈夫か…大丈夫じゃないな、記憶飛んでるな」

江華さんがいた

これは夢なのだろうか？よくある、アニメとか漫画見すぎて夢にも見るというアレだろうか？

いや、しかし、感覚はある。

五感という五感が生きていると告げている（混乱）

江華さんは俺の頭に手を乗せると『うん、再生しているから大丈夫だろう』と言ってくる。

「……ヤベエ大事なモン失った」

そう呟くと江華さんは「あそこぶつけたのかい」と聞いてくる

女の子がそんなこと言っちゃいけません！

先ほど、江華さんが『阿伏兔』って言ったが、俺はまさか、あの…春雨第七師団副団長の阿伏兔なんか…？

いや、アイツは確か、不死者じゃなかったはず。

阿伏兔という名の別人か？

いや、この世界に阿伏兔は一人で大丈夫なはずだ。

困惑しつつ江華と共に家に帰ると、こういうのは慣れっこなのか江華がいろいろ説明

してくれ、鏡を見せてくれる。

(阿伏兔じゃん)

あの本当は吉原炎上編で死ぬはずだったけど、作者に気に入られたお陰で最終局面まで生きていたというあの阿伏兔に成っていた。

それから、慣れるまでかなり時間が経過し、生きているという実感が湧いたある日のこと……

「……どこ見ても何もねえ、世紀末みてえな世界だな」

一人で星を歩いていると……

「~~~~~」

オロチが出てきてこちらを見てくる

「あん?どうしたオロチ」

足を止めてオロチを見ると、何故か悲しそうな声を出す。

「ん?何々?変な船がきてる?」

オロチの頭に飛び乗ると頭上を見上げる。

「お〜マジモンの船初めて見たなあ〜」

銀魂の漫画ではかなり見たが、こう、自分の目ではつきりと見るのは楽しかった。

「よし、江華に知らせてくるか!」



走って行こうとすると、オロチが鳴く

「二人ではやらねえよ？ 客人をからかう時は江華も誘わねえと尋常じゃねえくらい怒るからな」

―江華―

この星で生活して、もう何年が経過しているか分からない。

いや、数百年近く生きているかもしれない。

一人で生活していたそんなある日、荒廃したビル群の近くに小さい子供がいた。

その子供は1ヶ月で人並み以上に大きくなり、この世界に適応した。

つまるところ、自分と同じ存在が現れたのだ。

そこからなんとなく二人で生活して、なんとなく二人でたまにくる珍客をからかったり遊んで

オロチと戯れたり、二人で大声で歌ったり、拾ってきた男の子：いや、今はれつきとした男『阿伏兎』は物を見つけるのが上手かった。

荒廃したビル群の近くから大量の本を見つけたり、いろいろしていた。

退屈じゃなくなり、阿伏兔を見て揶揄うのが楽しくなった。

「江華〜！珍客きたぞ〜」

低音の良い声が聞こえてくる

「ああ、今行くよ」

番傘を持ち、声をかけられた方に向かう。

―阿伏兔―

やってきたのは夜兔の軍団で、江華と二人で派手に暴れてからかかって遊んだ。

まあ、死なないギリギリの範囲でボカボカ殴っていたら向こうが撤退を決めこもうとしたので、向こうの長らしき人物と話をつけることになった。

「俺たちは夜兔の故郷を見にきただけだ！別段何もしようとしてない！」

「だろうね、この世界じゃ、普通の人は一ヶ月も持たないさ」

江華が優雅に煙管をふかしながら言う。

「さて、帰ろ…」

江華が言葉を途中で止めたことに気づき、横を見ると

「…ああ、阿伏兔、アンタ着いて行きたいのか？」

「ん？」

江華は微笑み

「楽しそうな顔をしていたよ、まあ、初めて同族と出会ったんだ。外を見てみたいと思つても不思議じゃないさ」

そう言つてハツとなる。

確かに、このままここにいて星海坊主と江華の出会いを邪魔するわけには行かない。それに、銀魂の世界をもつと見てみたいと思つた。

「やっぱり、ここの主人にはバレるか」

そう言つて『アンタの方が主人つて感じはするけどね』と言う。

「江華、アンタは行つてみないか？」

星海坊主が誘うのは分かつてはいるが、長い間一緒にいた江華を見捨てる事はできない。  
い。

「いいや、私は行かないよ、この星を捨てる事は出来ないさ」

「だから行つてらっしゃい」と言う江華の答えに笑う

「それじゃ、俺は行つてくらあ」

そう言つて立ち上がると

「阿伏兔」

「ん？」

「行くのはいいけど、定期的にここに帰ってくるんだよ、悪い予感がするから」

おそらく、江華の言う事は『ここから離れたら死ぬかもしれない』という事だろう。

江華と同じ星で生まれた己は、きっとこの星以外では生きれない。

同じアルタナであろう地球では生きられるかもしれないが、かなりリスクは高い。

阿伏兔は船に乗り込む前に振り向くと、江華が軽く手を振っていた。

軽く手を振り返し、船に乗り込む

定期的に帰ることを約束して

く数年後く

宇宙海賊春雨、第七師団の団長が鳳仙になった。

(…いろいろ大変だったマジで)

何回鳳仙に腕挽かれるかと思ったか

「副団長！仕事が！」

「副団長！！団長から書類の整理が……！」

「だあああ!!字面と睨めっこするやつばかり俺に渡しやがってええ!あの旦那は?!」

「そ、それが…!数日前から居なくなってます…吉原に行くから後を任せたと」

「…吉原…?え?女遊びに行つたの?あのすつとこどっこい」

「?は、はい…」

「マジで…」

机に突つ伏すと密かに目をつぶり、地球の方々に謝罪する。

「どうやら阿伏兔（アルタナ）がいることにより、鳳仙は一足早く地球に降り立ってしまつたらしい。」

（すみません。早速原作破壊してしまいました）

流れ的に言えば、神威が春雨に入る↓鳳仙が吉原に行くつて流れだつたはず。

（…ん?神威?鳳仙…?ハツ?!）

ガバツと起き上がった衝撃で目の前にいた部下の顎にクリーンヒットする。

「つ…!?つ…!?」

痛がる部下と相反し、阿伏兔の後頭部はまるで痛くなかつた。

「お前からあ!!これから徨安行くぞ!」

「副団長…壊れてるつ…せつかくの第七師団の良心が…!」

とかなんとか言っている部下をフル無視して指示を出す

「惶安」

久々に降り立った惶安は相変わらず何も変わらなかった。

部下たちは息がしづらいいと言いい船に残っていた。

阿伏兔は江華がいたであろう場所に向かうと、そこはもぬけの殻だった。

(…出かけてるわけじゃなさそうだな…ん?)

本が折り重なっているところに行くと、小さな手紙があった。

それを取るとパラっとめくる。

「…おおー」

阿伏兔は内容に拳を振り上げる。

その手紙には『私も星を出て洛陽に行く。着いて行きたい人を見つけた』と書かれていた。

「星海坊主と出会ったか!」

その手紙には洛陽の場所(地点)と地図が描かれていた。

「よし!行くぞ!洛陽に」

「江華」

その日は相変わらずどんよりとした空だった。

(徨安に比べて太陽光がまるでない…)

これじゃあ、洗濯物が干せない…と思っていると、神晃(星海坊主)が入ってきて仕事のことをいろいろ話してくる。

その話を聞いていると…

「？」

「どうした？江華」

「…ああ、アイツ、ここをやっと見つけたのか」

「？アイツ？」

外から馴染みの気配を感じ、立ち上がる

「知り合いでもくるのか？」

「ああ、一種の兄弟みたいなものさ」

そう言つてドアを開けると…

番傘を差した人物がいた。

「江華く遊びに来たぜ」

「全く、どうしてアンタは勘でなんでも当てるんだい？」

江華の笑顔と、親しそうに話す阿伏兔を見て神晃が激しく動揺してこっちを見たりあっちを見たりしていた。

「!!？」

動揺しすぎて椅子から滑り落ちた神晃（星海坊主）は立ち上がって江華の後ろにまでやってくる

「江華さん!!?その人誰!?!もしかして、あの星にいた時の恋人!!?」

やかましいぐらいの大声に肘鉄を食らわすと「ブツ!?!」みたいな変な声を出す

「恋人じゃないって言ってるだろう?兄弟だよ」

「どーも」

「ちよつと待つて!!俺処理できないよ!!流石にこれ!!え?!江華さん長生きだったんだよね?!そんな子があの星で野郎と二人きり!!?体の関係あるんじゃないの?!」

「……………さあ、どうだろうねえ」

「え?!ちよつと今の間何!?!野郎困惑してるけど!どっちの困惑!?!ねえ!江華さん!!?ないつて言つて!俺泣いちゃうよ!!?」

「昔のことだからあったかもしれないね、忘れたけど」

「————!!」（声にならない悲鳴をあげてぶっ倒れる）



「……おいおい、氣絶しちやったよ？ 旦那をないことで遊ぶなんてよりタチ悪くなったな……」

そう言うのと江華は笑いながら『騙されやすいこの人が悪い』と言つて神晷を引きずつて室内に入る。

氣絶している神晷をベツトに放り投げ、椅子に座る江華に釣られて阿伏兔も座る。

「久しぶりだね、阿伏兔、元氣にしてた？」

「ああ、定期的にあの星には帰つてるぜ、それよりも問題なのは江華、アンタこそ帰つてないだろ」

「バレた？」

「バレるに決まつてんだらう、このすつとこどつこい。分かりやすいぐらい元氣ねえじゃねえか」

微妙に具合の悪そうな顔をする江華。

同じ星で育ったからこそわかるお互いの顔色。

「ほれ」

そう言つてダイヤモンドのようなものを渡す

「ああ、わざわざ取ってきてくれたのか、ありがとう」

徨安にある「アルタナの結晶石」であり、アルタナが噴出する「穴」の付近で稀に産

出される代物で、文字通りその星のアルタナの結晶である。

「俺も念のために常備してるからな」

阿伏兔は辺りを見渡していたが、何か納得したのか

「んじや、元気にしてるのも分かったし、これで帰るわ、部下どもを待たせてるからな」

「ああ、元気にするんだよ」

その言葉に阿伏兔は手を振る

「あと、その旦那に着いた嘘を正しておいてくれよ」

そう言っつてその場から立ち去る阿伏兔を見て微笑む

## 第2話 『阿伏兔（アルタナ）と江華と神威』

―阿伏兔―

数年ぶりに洛陽にやって来ると、江華が出迎えてくる。

「……………」

「……………」

何やら警戒している星海坊主と、ちんまりと江華の服を握っている可愛い坊主。

（神威やつと生まれたか、にしても随分でっかくなつたな）

「おー、元気にしてたか、江華…「はーい！ソーシャルディスタンス！密ですよ！家族間の密接は良いとしても他人は入ってこないで下さいね…ブベラツ!!」うるさい」

江華の拳が星海坊主の腹にクリーンヒットする。

「嫉妬は見苦しいよ、神晃。ほら、神威、叔父さんに挨拶しな」

そう言うくと神威が戸惑い気味に「よ、よろしく、神威…です」と言っていた。

（あー…可愛い、マジで可愛い…！）

「おう、よろしくな坊主」

良い子良い子すると「何するんだー！」と素の神威が出る。

「にしても、お前さんが子供を産むなんてなあ〜天変地異もあるもんだな」

「そういうアンタも、一丁前に部下なんて持って、そっちの方が驚きだよ」

「……」

阿伏兔と江華が話しているのを星海坊主がなんとも言えない顔で見つめていた。

阿伏兔はその顔を見て笑う。

「んじや、俺はこれで失礼するわ、いつまでも野郎が人妻と話してる訳にはいかないしな」

そう言って立ち上がった江華達に他の星のお土産を渡す。

く数ヶ月後く

地球に行った鳳仙の代わりに代理団長を務めることになった阿伏兔は山のようにある仕事と、他の師団の団長達と話し合いやら、侵略戦争やらいろいろやってて最早疲れた。

「……………」

原作に突入する前に自分が死ぬ

いや、正確に言えば侵略戦争辺りで数回死んだかもしれないが、アルタナのおかげで死んでないだけかもしれないけど。

なんで生まれ変わっても仕事というものが着いてくるのだろうか

「はっ、いつそのこと全部破壊しちまえば何もなくなるのでは!!」

「阿伏兔！考えが飛躍し過ぎてるぞ！」

ツツコミを入れてくれる云業

「いーじゃん。俺、頑張ってるよ？無理だよ、故郷帰ろうかなあ」

「それは辞めてくれ、アンタが辞めたら仕事が全部こっちにくる」

「俺たちも手伝うから頑張ってくれ」

「部下達が辞めさせてくれないよお!!」

テーブルに頭をガン！とぶつけると…

「副団長!!艦隊に何かが突っ込んできました!!」

「ああ？敵襲かあ？」

もうやる気のない阿伏兔に云業が『敵襲なんだから動いてくれ』と言っていると…

「よお、義弟。きてやったぞ、この星海坊主様が」

そう言つてやつてきたのはすっかり老けている（髪の毛が徐々に後退している）星海

坊主がいた。

（速●さんの声最高…耳に良いわあ）

自分の声も良い方だったが、何分聴き慣れてしまった分、他の低音には耳が癒される。人の艦隊に穴開けておいてよ、始末書増えただろうがこのすつとこどつこい…」

テーブルに突っ伏したまま言うとズカズカと星海坊主がやってくる。

「おい、バカ義弟。教えて欲しいことがある」

「……え？何？シリアス空気なの？そういう展開なの？」

「テメエはさつきから何言ってるんだ」

「…副団長、仕事のし過ぎて疲れ果てるんだ。一回叩けば直る」

云業がボカッと叩いてくる。

「イツツテエ!!俺は映らなくなったテレビじゃねえんだよ!」

頭をさすりながら起き上がる

「義弟。徨安にあるアルタナの結晶石の場所を教えろ」

ドンつとテーブルに手を乗せて言ってくる星海坊主の表情は実に真剣だった。

「アルタナの結晶石…ああ、江華のやつ、徨安に戻ってなかったのか」

立ち上がって付いて来いと言うと部屋に向かうと、大人しく後ろを星海坊主がついてくる。

なんか、すごい違和感だなと思いつながら進んで部屋に入り、室内の冷蔵庫を開ける

「テメエはこうなるって分かってて何も言わずにいたのか」

「アイツはてつきり知ってるもんだと思っただけだな、あの星から出る前に言っただか？アイツ」

「……………」

「その様子じゃ言ってたが、テメエがその意味を理解しなかったんだろ」

冷蔵庫からアルタナの結晶石を一つ出す。

「おら、貸し一つだ」

そう言つて星海坊主に投げ渡す

星海坊主はそれを受け取ると、マジマジと見つめていた。

「いいのかもらつて、こいつはアンタの……」

「予備は用意してある。それに、教えるにもかなり大変な場所にあるしなあ、めんどくせえことになる前にさっさと持つて帰れ」

「……礼をいう」

「へいへい」

手を振つて艦隊から星海坊主を追い出すと、云業がやってきて

「……良かったのか副団長。アレが最後の結晶石だったんじゃないのか？」

冷蔵庫の中に保管してあったアルタナの結晶石はアレで最後だった。

なんと言うか、あの場で渡したのは少しでも早く、あのハゲを江華達の元に返して家族団欒を過ごさせないといけない。

「問題ねえ、それに、明日はお偉い方がここに来るんだから隠さなきゃならなかったしなあ？」

不死者だと知っているのは云業ぐらいで、後は悪運が強い副団長という認識しかないだろう。

「さてと、明日に備えて一眠りしますかあ」

「おう、後のことはこっちで片付けておくから先に寝てろ」

―云業―

春雨第七師団副団長にして現在は代理団長を務めている阿伏兔は、あの夜王と呼ばれていた鳳仙の片腕として扱われていた。

本人はいかにもモブです。みたいな感じにいるが、あの夜王鳳仙の全力の拳に耐えている化け物のモブなんていてたまるものか。



「あー…終わった終わった」

「お疲れさん。阿伏兔」

「副団長！手当はしないで大丈夫なんですか？」

「んー？自分でやつとくからお前らはきつきと艦隊戻つて飛ぶ準備しとけ」

部下が前を歩いていて気づかないが、阿伏兔の隠してる方の腕が緑色のような煙を出しながら再生しているのが云業には見えた。

部下達がいなくなったのをみて

「相変わらず便利な能力だな、それ」

そう言う、「隠すのめんどくせえからクソ不便だぞ、これ」と言う。

「確かに」

春雨に不死者だとバレれば面倒なことになるのは他ならない。

肉の一片まで、体をバラバラにされるのがオチだろう。

「死ぬ手段間違えたらただの拷問になるからな、これ」

「そうだな、生き埋めになつたら永遠に生き地獄だな」

そう言いながら完全に再生した腕を動かしてみている阿伏兔

―洛陽―

星海坊主がアルタナの結晶石を取りにきてから数日後、阿伏兔達春雨第七師団は洛陽に私用のために向かっていた。

以前とは違い、一人で来たわけではないので、部下達がぞろぞろといる。

（モブだと思っただけ…俺、どう考えても鳳仙の位置にいない？大丈夫？俺死亡フラグ立ってない？）

阿伏兔がいる位置には云業がいるし、自分の未来が怖くなる今日この頃。

洛陽に来たので江華の家に訪問すると、江華が出てくる

「あら、久しぶりに顔を見せたわね」

あの頃から変わらない江華だが、一つだけ違ったのは弱々しくなっている点だろう。

（…あの結晶石飲んでねえのか…いや、飲んでも星から離れてるから効き目が薄くなってきたんのか）

まあ、なんとなく分かっていた展開だが

「すまないね、来てくれたというのに、何も用意してないけど」

「いいから病人は休んでな」

江華がベットに座ったのを見ると、隣には小さい女の子がいた。

「紹介するのが遅れたね、この子は私の二人目の子・神楽だ。怪我して休んでるからあんまり大きな声で騒がないでくれたら嬉しいよ」

「あたりめえだろ」

椅子を持つてきて座ると、江華が笑いかけてくる

「アンタはちつとも変わらない。元気なままだね」

しんみりとした空気に頭をガシガシと掻く

(……こういうのは好きじゃないんだけどなア……)

「お前さんの言う通り定期的に帰ってるからな」

そう言うのと江華は笑う。

「確かに、言いつけを守る良い子で良かったよ」

そう言うって頭を撫でてくる

なんか気恥ずかしいが、その笑顔を見て目線を逸らす。

(……あの星に居た時はこんな満面の笑顔は見たことなかったからな)

こんな笑顔を向けるようになったのも、あの星海坊主や夜兎兄妹のおかげなのだろう。

「んー……マミー？おきやくさんアルか？」

神楽が目をこすりながら起き上がる。

「ああ、神樂起こしちゃった？」

「ううん、ふつうに目がさめたアル、そのお兄ちゃん。誰アルか？パピーの知り合いアルか？」

「私の弟だよ」

そう言うくと神樂は笑顔で『似てないアル』と言う

「兄弟が全員そっくりだと思ふなよ、嬢ちゃん」

そう言つて頭を優しく撫でると神樂が『えへへ、撫で方がマミーとそっくりアル』

「え？俺、女みたいな撫で方してた？」

「優しい撫で方が出来るようになったじゃないか、神威の時は思いっきり撫でてたけど」

「仕方ねえだろ？初めてだったんだからよ」

そう話している二人を交互に見る神樂は実に楽しそうだった。

「そうそう、最近地球に行ったんだが、そんな時に珍しいもんを見つけたから買ってきたんだ。ほれ」

そう言つて袋に入った飴玉を渡す。

「うわあ！きれいアル!!」

琥珀色の水晶飴玉で、かなり値は張つたが、綺麗だったので気まぐれで買つて神威か江華に渡そうと思つていたので。

(神樂が生まれてたのは想定外だったけど)

「…本当に綺麗だね、金色?の飴玉なんて初めて見たよ」

「それ、琥珀色の飴玉だけ、微妙に金色じゃねえんだ」

「へえ」

「頂戴アル!」

そう言つて神樂が欲しそうにしたので、江華が『子供が舐めても平気なやつかい?』と聞いてくる

「おう、酒とかそういうのは入ってなかったから大丈夫だ」

江華から飴玉を渡されると神樂は早速舐め、美味しそうに舐め始める。

「ありがとうアル!!」

パアアア!と笑顔になる神樂に心の中で買ってきて良かった、と拳を振り上げる。

その笑顔を見て微笑み立ち上がる

「そろそろ帰るわ、また数日後に様子見にくるからな」

「ああ、お土産ありがとう」

「おう」

そう言つて手を振つて背中を向けると…

「名前なんて言うアルか?!」

元気な声に少しだけ振り返ると

「…阿伏兔、よろしく頼むぜ嬢ちゃん」

「神楽アル！よろしくネ！」

手をブンブン振る神楽に笑って手を振り返す

江華の家から出て歩いていると、部下達がいる地点から騒がしい音が聞こえてきた。

「……………ん？」

少し先に云業に喧嘩をふっかけている神威がいた。

（あー…やっぱりそうなるポジ？やっぱり俺死亡フラグ立ってるのかあゝ）

ため息をつきながら歩いてそちらに向かう。

ある程度近付くと、蹴りを飛ばしてきた神威の足を軽く小突く

…うん。軽く小突いたつもりなんだよ？なんで吹き飛ぶの？

「なーにしてんだ、人の部下に手エ出して」

「阿伏兔…」

シリウス空気をとことん破壊してやると決心した。

…無理だもんシリウスな雰囲気出すの

「…あ、アンタは…」

(あー…これはあのシーンに突入するかあ)

「俺は強くないといけないんだ…！強くなつて…」

神威が走って向かってくる

軽く拳を振るうとまた吹き飛ぶ

「おら、帰るぞ、お前ら〜」

「は、はい！」

部下達がいそいそと立ち上がり艦隊の方に走っていく

「…母さんの弟なら…母さんをあの星に連れて帰ってほしい…」

足を止めると振り返る

「そいつはお前さんの意思か？江華の意思か？後者なら聞いてやるけど、お前さんの意思なら聞けねえなあ」

「！」

そう言つて手を振って歩き出す。

「俺は！あの男より強くないといけないんだ！」

「！」  
そう言つて走つてくる神威の拳を避けると…

神威が避けるのを分かつていたように足蹴りを食らわせてくる

（イツツテ!!子供の蹴りじゃないくらい重いんだけど!）

神威を思わず殴り飛ばすと

「…そうまでして母親を連れて行きたいのか？」

「ああ…」

「…明日まで待つてやる。それまでに母親を攫うなりなんなりしてくるんだな」

そう言つてその場から去る。

（原作救済なんてするつもりなんてなかったからな…）

今後どうなるかと思つて待つことにした。

「翌日」

阿伏兔は結局、気になりすぎて徹夜してしまい、船の先に座り待つていると…

「！」



遠くの方から神威が荷物を持ってこちらに向かってくる。

傍らに江華がいないのを見て安心してしまふ自分がある。

船の先から降りると、神威の前に降りる

「母親はどうした?」

「……強くなつて、また戻ってくる」

「そうか、なら頑張ることだな、言つとくがかなりキツイぞ、根え上げんなよ」

そう言う阿伏兔の横を通り、船に乗り込む

その船に向けて阿伏兔も歩いていく

## 第3話『運命の日（吉原炎上篇）まで意外にもやってくるのは早い』

―阿伏兔―

神威が春雨第七師団に入ってから数年…

神威の強さを見込んで団長に推薦したらあつさりと団長として就任した。

（やっぱり、原作通りに行かないとなあ〜）

幸いにも神威は強さには問題ないし、ある意味、神威の強さに第七師団は引つ張られていくだけはあるけど…

「反抗期の相手はさすがに骨が折れるなあ」

「……本気で骨折れてるぞ」

戦闘馬鹿神威は任務中に、負傷した仲間も興奮して殺ろうとしてたので止めたら思っクソ本気で殴られたのである。

おかげでアルタナ半分ぐらい使いかけたんだけど

「よっかいしよ。んじゃ、地球に行く準備でもしますか」

完全に骨が繋がったのを見て立ち上がる

「阿伏兔。まだ行けるのか？」

云業の氣遣わしげな言葉に「おー、大丈夫だぜ」と返す

以前、神威が団長に就任した任務以降からあまり徨安に戻れずにいたため、神威の前で吐血してしまったことがあった。

アルタナがいつのまにか底をついており、マジで死にかける寸前だった。

あの時は云業が気づいて急いで徨安に向かうと言ったおかげでなんとか事なきを得たが、あれ以降神威は八つ当たりはしても、定期的に徨安に帰るように阿伏兔に伝えていた。

なんか、微妙に神威と阿伏兔の関係性が変わっている気がしてならない。

船に戻ると、神威がモニター越しに地球を見ていた。

ー神楽ー

神楽は地球の万事屋に暮らし始めてから数年が経過した。

父が家に連れて帰るといいう話になったが、神楽はどうしても地球で暮らしたい、銀時

達と暮らしたいと泣き、結果的に神楽は今後も万事屋にすることになった。

いつも通りの日々が戻ってきた神楽は、お妙と共に街を歩いていると…

「神楽ちゃん」

「何アルか？姉御」

手招きされてそちらに行く

「神楽ちゃん、せっかく街に来たから何か欲しいものある？この中から選んで良いわよ」  
お妙の言葉に『良いアルか!?姉御大好きアル!』と言って抱きつくとお妙は微笑んでくるお妙

お菓子が沢山並んでおり、目をキラキラさせながら見ていると…

「あ、コレが良いアル」

そう言つて琥珀色の飴玉を指差す。

「あら、それでいいの?」

「うん」

そう言つて買つてもらつた神楽はその飴を眺める。

「綺麗ね、それ」

「うん、綺麗アル。でもなんか見たことあるネ…昔誰かに買つてもらつた記憶があつたネ」

昔、まだ、母が生きていた時代にコレをもらった記憶があった。  
(誰だったアルか)

病気がちだった母をよく見舞いに来た：

『私の弟だよ』

「あ、マミーの弟にもらったアル！コレ」

「お母様に弟さんがいたの？」

「いたアル！まるで似てなかったけど！」

母が死ぬ数日前に来た以降、音沙汰無くなった叔父。

―神威―

春雨に迎え入れて来た阿伏兔の事は最初こそ気に入らず、何回か殺し合いを申し込んだ

その度にうやむやにされたり、一方的に負けるフリして来たり、神威は相手にされないことにイラついていた。

かつて団長だった鳳仙という男より強いと他の奴らが言っていたのに、全然本気を見せたくない。

そして何より腹が立ったのは母と長い年月をあつた星で生活していたこと

「おら、神威帰るぞ」

かつて、母がいた場所に座り込む

「……………」

「おーい？ 団長〜？」

阿伏兔はいろいろ回収したのか袋に何か入れていた。

「…阿伏兔。母さんやお前はここの星から離れなきゃ死なないんだよな」

「ん？ ああ、そうだけど」

阿伏兔は退屈そうにテーブルに座る

「母さんはどうして、生きることよりあの男と一緒にいると言い張ったんだと思う？」

「あー…伝わってなかったか〜？」

「…何」

「そう睨むなって、生きることより幸せなこと見つけたんだろ」

阿伏兔の少しだけ嬉しそうな顔にモヤモヤする。

「……………死んでしまったら元も子もないだろ」

「まあ、そうだなあ」

阿伏兔は苦笑いし、立ち上がって出入り口に向かう。

神威はその後ろ姿を見て立ち上がる。

「……………」

（お前がたまにどこ見てるのか分からない瞳をするのも、母さんが死んだせいなんだろ…なんで、生きろなんて言わなかったんだ）

母さんや阿伏兔にとって『生』は意味のないことなのだろうか、生きていくという事は地獄なのだろうか

二人がどれくらい時間を過ごしていたのか神威には分からない。

一生わかる事なんかないだろう。

「阿伏兔ー、地球に行ったら一回でいいから鳳仙の相手させてよー」

「え?!なんで?!嫌だよ!?!めんどくさいからあのひと宥めるの!」

ー阿伏兔ー

数日後、春雨第七師団一行は無事に地球にたどり着く事が出来た。

部下達の大半は船に残し、吉原へは神威、阿伏兔、云業の三人で向かうことになった。（うおー！だいぶ進化したなあ！歌舞伎町とか見てみてえけど、流石に観光しに来たわけじゃないから無理か…）

しよぼくれながら、吉原の硬い門を潜り三人で歩いていると流石に目立つのか通行人達の目が神威達に注がれていた。

「吉原の鳳仙と会谈予約してる者ですけど〜」

（んな、軽〜い感じで門番に言ったところぞ…）

「どうぞ」

（ああ、普通に開けてくれんのね）

阿伏兔達は一室に通される。

「そーいやあ、夜王と呼ばれた男が戦いを放棄するほどここに執心なんだろう？阿伏兔」

「あん？そーうだったな、確か日輪とか言ったが…団長？まさか自分から絡みに行くとか言わないよな？普通に会って、上からの依頼を言ってくれりゃ…」

「それは阿伏兔の仕事だろー？俺が来たのは夜王と呼ばれた男と戦うために来たんだよ」

「おいおい、団長？」

止めようとする、神威がにっこりと笑い



「相手にしてくれない阿伏兔が悪いんだからな、ほら行くよ」

そう言つて歩き出したのを見て派手にため息をつく

「団長！日輪に会いに行くのか？」

云業が後につき、阿伏兔は項垂れながら進む。

「そうしたいのは山々なんだけど、なんかてみやげとかあつたら良いと思うんだけど、阿伏兔ー？なんか良い手土産あるかな？」

「……晴太つていう坊主を手土産に行くつていう手段はあるが、あんまりおススメしないぜコレ……」

「うん、じゃあ、その子供を連れて鳳仙に会おうか、その日輪が唯一残した子供つて事で」  
ウキウキな神威の背中を見て小声で「コレ俺が悪いの？仕事の量が異常だったから時間ないだけだったのに……」とボソボソ言っていると、云業が「まあ……ドンマイ」と返してくる。

物語に介入するのはやはり、緊張する事で、目の前に銀さん達が現れると流石にテン

パリそうになったが、深呼吸して本腰を入れる。

「どうやら晴太を逃がす前に敵さんが来たようだぜ」

銀さんの言葉にこちらを向く神楽達

（神楽ちゃんいるじゃん…マジ？あの再現しろって？嫌だよ…）

番傘で少し顔を隠して落ち込む。

（しゃあねえなあ…覚えてるかわかんねえし、普通に台詞言つて晴太くんを回収するか）

「悪い事は言わねえ、そのガキ寄せ、そうしたら見逃してやるよ」

一応警告すると、明らかに警戒しているのが分かる。

月詠がクナイを投げてくる

（いきなりかい!!）

番傘で全部払い除ける

「今の内に逃げろ！」

こちらから走って行かなかったたので月詠の方から走ってくる

女性を蹴り飛ばすなんて趣味なかったが、基本的に銀魂の女キャラは平気だろと思

い、蹴り飛ばすと…

「月詠さん!!!」

（あれ？手加減したのに血吐いて吹き飛ばされたんだけど?!）

例えでいうなら神楽に『倒す拳と殺す拳、どっちが重と思う?』って問いを投げた後の蹴り並みの威力が出た。

銀さんが応戦しようとした際に、下から云業が攻撃してくる。

晴太を抱えてジャンプした銀さんの腹に云業のデカイ傘がぶつかる。

晴太を回収した後、思いつき蹴り飛ばす云業

「晴太あ!!」

神楽が走って助けに行こうとした時：

「邪魔だな、退いてくれよ。言っただろ?弱い奴に…用はないって」

「に…い…」

最後まで言い終わる前に神威の傘が神楽の頭にぶつかる。

「…おうおう容赦ねえな」

足元が崩壊し、神楽達が落っこちて行く。

「こんな派手にやったらあの爺さんにどやされそうだ」

「大丈夫だろ、あの爺さんはこの街とあの花魁様にご執心さ、それにちゃんと手土産用意したしね」

云業が晴太を抱えたのを確認して神威が歩いて行く

「それより阿伏兔。お前…手加減しただろ?」

（むちやくちや怒ってらっしやる〜）

「んー？いやあく？思わず別嬪でなア？つい足蹴りが緩んじまった」

「そうやって甘く見てたら痛い目にあうぞ、お前。それに俺は手加減してる奴はあんまり好きじゃない」

「ハイハイ。以降気を付けますよ〜」

軽く流すと神威くん舌打ちする。

（おー…怖ッ、あれでも結構強めの威力出たはずなんだけどなア、神威くんにはバレるか〜）

〜鳳仙との対面〜

鳳仙と再会したのはいつぶりになるだろうか分からなかったが、久しぶりに見た鳳仙はごっつくなっていた。

貫禄ありすぎて怖かったよ

「邪魔しないでよ、今良いところなんだ。邪魔すると…殺しちゃうぞ?」

「団長ー!」

云業が地面にめり込みながら叫ぶ

鳳仙と神威の二人がやり合ってるのを晴太の首根っこを掴みながら眺めていた。

「だから言っただよ云業。ああなったら誰にも止められねえって」

云業の命と俺の腕があれば止まるだろうけど、消化不良の神威は余計なことをしかなないのでそのまま放置することにした。

「お前なら止められんだろ！阿伏兔！」

「俺の腕と引き換えにならなあ？目の届く範囲で暴れてくれるならなんでも良いや」

その内鳳仙の方から飽きるだろうし

「こんのっ！離せよ!!」

お暴れしている晴太くんを見ると…

「っ……」

普通に見ただけなのにめちやくちやビビられる。

「おら、坊主さっさと逃げるなら今のうちだぜ」

そう言っつて解放すると「へ…？」と返してくる。

「お前が交渉材料にならないのは分かったから、どこに行くなりなんなり自由にしろ。

俺はあの団長止めることだけ考えるのに忙しいからな」

そう手を振って立ち上がると、晴太が何か言いたげにしていたが、逃げる方が先だと思っただのか走り去って行く。

―神威―

鳳仙との戦いは結局、阿伏兔と云業の仲裁で終わりになった。

場所を移し、生きてはいるが、気絶している云業と吹き飛ばされた腕を見ている阿伏兔の近くに座る。

「ねえ、阿伏兔、不死者の血って他人に輸血できないの?」

「あ? やめとけやめとけ、ロクなことにならねえぞ」

阿伏兔の腕がみるみる内に再生して行くのを見つめる。

「なんでダメなの?」

「普通の人体じゃ、腕を失ったら勝手に再生するもんか? ちげえだろ、失った腕は再生しねえし治すとしてもくつつけるしかねえ」

完全に再生した阿伏兔は腕を動かしながら準備運動をしていた。

「体の仕組みがちげえから不死者の血を輸血したら身体が溶け落ちるだろ、普通の体に煮えたぎるマグマを注ぐようなもんだよ」

「ところで団長様？お前さんの妹がいたが、戦うつもりか？」

「いいや、アイツは弱いから放っておくよ、阿伏兔は行くの？」

「まあな、可愛い姪っ子の近況を見に行きたいからな」

手を振って部屋から出て行く阿伏兔を黙って見送る神威  
スクツと立ち上がって神威もその後が続いて歩いて行く

## 第4話『強キャラに身内判定されたら割と生き残れるもの』

―神威―

前を歩く阿伏兔の背中はいつまでも変わらなかった。

春雨に入ったのがまだ幼かった頃だったというのに自分の背丈はぐんぐん伸びていき、それなりに年をとる。

なのに、阿伏兔は身長も何も変わらなかった。

老けメイクしてまで年を取っていると偽装しているのは、母さんと同じ体質だから。母さんは、あの星から出て行ったのは、あの男と添い遂げたいと思ったから。

それと違って阿伏兔は何が理由であの星から出て来たのだろう。

「阿伏兔」

「あん？またなんか問題起こしたかー？」

侵略した惑星の情報をまとめながらそう呟く

「…起こしてないよ」

「そうかそうか」



春雨に來た時は、第七師団団長（仮）・阿伏兔の甥っ子としてあんまり良い顔はされなかつた。

何回か喧嘩を売られてはボロボロになって歸つたこともあつた。

他の師団の構成員と戦鬪になる分には構わないが、構成員を殺すと面倒なことになるらしく、その度に阿伏兔の拳骨を食らつていたのを思い出す。

「阿伏兔、たまには身体動かさないと鈍るよ」

「ちやーんと動かしてるから平氣だよ坊主」

「坊主じゃない、神威だ」

「はいはい、神威くん」

「……………」

もはや、阿伏兔が父代わりのようになっていたのを薄々感じていた。

星海坊主の腕をもぎ取り、實質、絶縁關係に近い。

17歳になった時に、阿伏兔が団長に推薦して來た為、神威は強い相手と戦いたいたいともあり、何も文句は言わず団長になった。

「阿伏兔、相変わらず書類多いねえ」

「そうだよ？馬鹿みたいに仕事多いからなあ」

ため息をつき仕事をしている阿伏兔にいつも通りの笑顔を向けて

「次の任務ってどこ？」

「確か、惑星ローだったぜ」

二人で打ち合わせしていると、云業が入ってきて話しかけてくる

神威の視線がそちらに向くと…

「ゲホッ…」

阿伏兔が何か吐いていた。

さつきまで顔を上げていた阿伏兔が口に手を当てて下を向いていた。

「……阿伏兔……！」

口から血を吐いていたのが、かつての母に重なる。

「阿伏兔!!補給しなかったのか!?!」

事情を知っているのか云業が阿伏兔に駆け寄る

「……無くなってた」

「馬鹿野郎!そこら辺省いたらお前が死ぬんだぞ!とりあえず徨安に戻れば良いか?!」

云業がテキパキと指示を出す。

「徨安」

阿伏兔を背負って徨安に降り立った云業と着いて行くと聞かなかつた神威の三人で目標地点に向かつて歩き出す。

「団長。阿伏兔の奴頼むぜ、アルタナの結晶石取ってくるから」

そう言つて云業はそこから去つて行く

「…阿伏兔」

「……生きてる…よ、団長様」

そう言つて大きな手が頭を撫でてくる。

「阿伏兔…お前はこの星に残りたいと思わないのか？」

「この何もねえ星に…一人でいろつて？このすつとこどつこい寂しいだろうが」

阿伏兔は徐々に体力が回復しているのかだんだん悪態をついてくる。

「……寂しくても生きていたいと思わないのか」

その言葉に阿伏兔は笑う

「少なくともお前ら悪ガキが生きてる内は死なねえつもりだけだな」

そう言つて笑う阿伏兔は無駄に大人びていてムカついた。

どう足掻いたところで自分より先を歩くコイツ。

阿伏兔の求めるものは何か何も分らない。

自分のように強さを追い求めているわけでもない。

「団長？おーい、神威〜」

吉原の廊下にて声をかけてくる阿伏兔

「？何、阿伏兔」

隣にいた阿伏兔が声をかけてくる。

「とりあえず、晴太ってガキが追われているのさつき見たが、どうすんだ？放置？」

「…助けようか、会わせてあげてみたいし、日輪に」

「へーい、了解したぜ」

そう言つて神威に着いて行く阿伏兔。

ー晴太ー

百華の手から逃げていた晴太の前に現れたのは、手練れの百華達をいとも容易く倒した夜兎の海賊だった。

「そんなに会いたいなら会わせて上げるよ？日輪に」

そう言つて笑顔を向けながら血まみれの手で服を直してくる。

「さて、行こうか、阿伏兔子守頼むよ」

「え？俺？」

「阿伏兔なら得意だろ？そういうの」

「有無を言わせねえじゃん…分かつたよ」

そう言つて「行くぞ坊主」と言つて傘を肩に担ぎ歩いて行く

晴太は一瞬恐怖が勝つたものの、覚悟を決めて彼らの背を追う。

子供一人でこの戦闘が行われている中を走るのは危険だろう。

それから二人の背を黙つて見ながら進む。

この二人、明らかに強いのは分かるが、団長と呼ばれた男はその後ろを歩く男より弱いというのが薄々分かる。

「ほら、そこにいるよ、君のお母さんは」

そう言つて男が指差す方には一つの扉があつた。

「母ちゃん…？」

中にいるのは母だ、と思ひ駆け寄る

「母ちゃん!!帰ろう！」

ー阿伏兔ー

晴太が必死で日輪に呼びかけている時、鳳仙がやってきて晴太の出生についての話をしていた。

そんな矢先に木刀が飛んできて扉を破壊する。

(こうしてみると、あの木刀の強さと耐久性異常じゃね?)

真剣に勝るとか、そして、その木刀を壊した次郎長とかやばくね?  
他にもいたと思うけど忘れた。

「銀さん!!」

「俺の事はいいから行けよ」

こう見るとカッコいいなあ銀さん。

(顔に出さないようにしよう)

変な風に思われるのもめんどくさいし

「母ちゃん!」

「晴太あー!」

「お熱いねえ」

感動的な再会に独り言を呟くと鳳仙に聞かれてたのか睨んでくる。

「阿伏兔！貴様、何が目的だ！神威をワシにけしかけて、坊主を日輪の元にまで手引きするとは！」

（え!?俺?!そのセリフ神威に言うはずだろ?!ここは一回…つてあつぶね?!）

鳳仙の手刀が飛んでくる。

大慌てで飛んで避ける。

「まあまあ落ち着いてくださいよ、鳳仙の旦那」

そう言つて神威がニコニコ笑いながら鳳仙の肩に手を乗せる。

それに何かイラついたのか、鳳仙がまた手刀で攻撃する。

衝撃で柱が折れる。

「コワツ、そんな怒らないでくださいよ。心配しなくても手は出しませんよ」

鳳仙の怒りの矛先が神威に向き、阿伏兔はそそくさとその場から離れる。

彼らの戦闘は最初こそ鳳仙が勝っていたが、さすが主人公補正なのか徐々に銀時側が優勢に乗り出し、月詠達と一緒に袋叩きにしていた。

「なあ阿伏兔。お前ならあの人数でやりあえる?」

神威の言葉に『うーん』と考え込む

「あの多さは面倒だな、まあ、百華ぐらいならなんとかやれそうだけだな」

「あのお侍さんは?」

「(どうせ主人公補正があるから) 難しいだろうな」

「へえ」

何か納得している神威を訝しげに見つめると…

「あ、イテェ!」

神威の頭に障子がクリーンヒットする。

一気に太陽光が差し込み、鳳仙が絶叫しながら焼けて行く

映像で見たときはアレだったけど、こう目で見るとなんか怖いな

「うおおおおお!!」

銀時が気合を入れて鳳仙に木刀を突きつけ吹き飛ばす。

あの木刀強すぎでしょ

「勝利したみてえだな」

「そうみたいだね、やっぱり面白いね、侍って」

神威はそう言っただけで立ち上がる

「さて、帰ろうか阿伏兎」

「もういいのか?」

「もういいよ、飽きた。それにお前が知ってた姪っ子の成長も見れただろ?」



「うんまあ、遠目からだけだな」

そう言つて鳳仙を茶化しもせず、去ろうとすると…

「！」

真後ろから殺気を感じ、思わず傘で防いでしまう。

「馬鹿兄貴!!馬鹿叔父!!何コソコソ逃げようとしてるアルか!!」

鳳仙にやられたのか片腕が宙ぶらりんの神樂が傘を振り回して攻撃しようとしていた。

「神樂ちゃん!!ダメだよ!!怪我してるの!!」

新八が神樂を取り押さえる。

「頭を思いつきり殴り飛ばしたっていうのに生きてたんだ」

「……」

神威は神樂を見て先ほどと変わらない笑顔を向けると

「せいぜい強くなりな、馬鹿妹。弱い奴に用はない」

そう言つて手を振る。

「待て!・神威!・神威!・!!」

阿伏兔は神威より先に屋根の上から降りる。

―星海坊主―

星海坊主は直射日光が直当たりする崖の近くにくると、大きな傘が刺さっている墓にくる。

「また随分と暑苦しい場所に眠らされたもんだな。ザマアみやがれ、鳳仙」  
「遊女達がよオ、せめて死んだ後ぐらい日イ沢山浴びさせてやろうつてよ」

銀時が後ろにやってくる。

「良くもまあ、夜王と言われた鳳仙を倒したもんだ」

「…冗談言うんじゃないやねえ、あんなの袋叩きだ。一人じゃ何も出来なかった。で…？手前は何しに来たんだよ」

「警告だよ、お前、死ぬぞ」

星海坊主の言葉に「あ、そう」と返す銀時。

「吉原の事だが、引き続き第七師団が管理することになったらしい。どうやら春雨上層部も上手い具合に丸め込まれちゃったようだな」

「……ことは」

「なんかあれば第七師団が介入してくるってことだ」

「……」

怪訝な顔をする銀時を見て星海坊主はため息をつき

「あの馬鹿息子は吉原になんぞ興味ねえよ、あるのはお前だ、まあ、当分は問題ないだろう、管理してるのが俺の義弟だからな」

「義弟……ハゲに弟いたのか」

「ハゲじゃねえ、俺のじゃねえよ、俺の嫁の弟だよ」

「！確か、神楽が言ってたな」

「一応警告だ。俺の息子は目を合わせれば喧嘩ふっかけてくるような悪ガキだが、俺の義弟は怒らせると星一つが壊滅するから気をつけろ」

「……そんな強えのか」

「少なくとも鳳仙よりかは強い」

「……」

そんな存在が神威を団長にして自分は副団長の職にいるのかは疑問だったが、不死者だという身の上を考えれば、少しでも隠れ蓑に出来る存在がいれば安心出来るのだろう。

「あんまり過ぎた事すれば消される、それだけ頭に入れておきやいい」  
そう言つて銀時の横を通り過ぎる。

「阿伏兔」

「フア…ブエツクシ!!!」

(なんか…とんでもねえ噂立てられてる気が…)

「風邪か?副団長」

「(不死者が) 風邪引くかよ」

宇宙海賊春雨の本艦の廊下を歩きながらそう呟く

「あー…なんとか纏められたが…団長の奴はどうしてる?」

「確か、まだ地球にいるはずだな、会議終わった阿伏兔も来てとか言つてたな」

「…マジかよ、無理矢理にも程があんだろ」

「まあ、そうは言つても行つてやるんだろ?可愛い甥っ子の頼みだしな」

「うるせえ…アイツほつたらかしにしていると問題しか起こさないから嫌なんだよ…」

頭をかきながら先を歩く阿伏兔を見て部下は呟く

「……阿伏兔の奴、歳取らな過ぎじやねえか……？俺より歳行つてゐるはずなのに俺の方が老けてゐるなんて……気のせいかな？」

## 第5話 『強さに固執しない奴ほどもめっちゃ強い』

一日輪

「そうかい、第七師団がここを管理することになったのね」

吉原の空を覆っていた鉄板が開き、太陽光が差し込んでいた。

「つ、つまり…その気になれば好き勝手にされる可能性があるんですか？」

新八の心配する声に銀時が

「まあ、星海坊主の馬鹿息子はここに興味なんてないらしいし、ここを直接管理してる阿伏兔つてやつも、先代の団長・鳳仙が死んだからその引き継ぎしてるみたいなものだし、平気だろ」

『俺の義弟・阿伏兔には気をつける。アイツは本気にならない分にはマシだが、本気になつたら馬鹿息子より手が付けられねえ、何かあつたら俺が助けに入つてやる。神楽ちゃんのためだからな』

そう言う星海坊主の言葉が脳裏に浮かぶ。

（強さが鳳仙以上とか、考えたくもねえよ…何？夜兔つてそういう奴しかいねえの？）

銀時は神楽たちより先に帰るために歌舞伎町を歩いていると…

「…………ええ…う…」

目の前に見覚えのある服装と番傘が見え、足が止まる

ゆつくりと横道に逸れて伺うと、星海坊主が言っていた『阿伏兔』なのを見てため息をつきずりずりと地面に座り込む

(マジかよオ〜!?まだいたの?!てか!一人で危険人物がフラフラしてんなよ!)

顔を上げてみると阿伏兔は何か探しているようで、足を止めたり足早になったりしていた。

(…:そーういやあ、アイツといつも一緒にいた馬鹿息子がいねえじゃねえか…うん、とりあえず離れよ、二連続で戦いたくねえ)

そう感じ離れていく

―阿伏兔―

春雨の本艦隊から第七師団に戻り、そのまま地球に來た阿伏兔は神威が仕事をぶん投げて來たことにイラつきつつ、仕事に当たっていた。

「なんで自分で管理しねえんだよ第八師団団長の奴」

苛々しながら第八師団団長がミスってばら撒いた宇宙産の麻薬を回収するために地球のある場所に来ていた。

時刻はすっかり夜になってしまい、眠気やら何やらで苛々マックスだった。

港に来ると丁度よく運送している人間達があり、今から外国にでも売りつけるのか、隠すのかどちらか分からないが、運ぼうとしているのを見たので早速姿を見せる。

「な、なんだ！ 貴様は!!」

「こちとら早く帰って休みたいのによお……お兄さんら好き勝手してくれるじゃねえか……まあ、ミスってばら撒いたあの野郎にも責任はあるけどな」

帰って寝たい、と苛々して傘がメキツと鳴る

「さっさと回収して帰るか」

「……これ人間の死に方か？」

阿伏兔が帰った後、現場から通報があったため、真選組は急ぎ現場に急行する。

土方は目の前の惨状にタバコをふかしながら見つめる。

人間の死に方とは思えないぐらいの腕力で捻り潰されている人間だった遺体達。



「ザキ、なんか分かったか？」

「はい！被害者は密輸を行っていたらしく、宇宙海賊春雨から流れてきた物資を横流ししていたらしいです」

阿伏兔は真選組がやってくるのがわかったが、頭に血を登らせ過ぎて反応が遅れてしまった。

(…しまった。俺ヤバいぞ、今…)

傘でぶん殴ったり、手刀で殺したりしたせいで大体返り血塗れである。

完全にザ・犯罪者である。

(屋根の上行って逃げるしかねえか…)

そう感じ、屋根に登った時…

「犯人はまだ現場にいるって言ったじゃないですかイ、土方さん」

その言葉にピシッと固まる。

横目で見ると、そこにいたのは沖田くんとクールにタバコを吐く土方がいた。

(…面倒くさいけど…なんか、戦ってみたい)

夜兔に生まれ変わってしまった宿命なのか、こう、なんとか強そうな奴を見ると

なんかワクワクするのである。

「はあ…ツイてないなあ、お前さんら」

血だらけ（#返り血）の手で髪の毛を搔くと、向こうも殺気に気づいたのか剣を構える。

「声かけなきや見逃してやったっていうのに、まあ、警察の建前上仕方ねえのか」

一歩踏み出し、勢いよく二人の背後に回る

後ろに回ったのに驚いたものの、殺気に気づいた沖田くんが刀を向けて来るのがゆっくりと見えた。

「!!総悟!」

沖田くんを吹き飛ばすと勢いよく、地面にぶつかると

土方くんの頭を思いつきり傘でぶん殴るとギリギリで防いだのか、刀が折れる。

そのまま足場が壊れ、屋根を貫通して地面に落ちる。

（いつつね…ここであんな遊んでたら団長がめんどくさい事になるな、早く帰らないと…）

傘を背負い、その場から退散しようとする、後方から殺気を感じる。

真剣が飛んで来るが傘で防ぎ、そのまま沖田くんの胴体を蹴り飛ばす。

割と力を入れたせい、沖田くんがかなりの血の量を口から吐く

「ゲホッ！ゲホッ!!」

このまま足蹴りにするのもあれだなと思い、神威によくやるげんこつで地面に叩き落とす。

屋根から落つこちた沖田くんを黙って見て他の屋根に乗り移る。

屋根の上を走っていると、道中に走っている神楽と新八が見えた。

(早く帰らないとめんどくせえことになるな…)

阿伏兔が前を向いた時、銀時の視線がこちらを向いているのに気づかず

第七師団・戦艦前

「おう、帰ったぞ」

部下にそう言うと部下達は啞然とする。

「返り血塗れじゃねえか、阿伏兔!」

云業の言葉に阿伏兔が「うん、仕事した後地球のお巡りと喧嘩したからな」

「団長は帰ってきたか？」

「後30分足らずで帰って来ると思うぞ」

「んじゃ先に風呂入ってるわ」

そう言つて手を振つて艦内に入る。

艦内に入ると、シャワーを浴びながら返り血を流していた。

(…しっかし、楽しかったな)

主要人物だから大丈夫だろうと思ひ、割とガチで戦つてしまった。

風呂から出て、いつも通りの服装に着替えて外に出ると、宇宙に出ていた。

「あ！阿伏兔いたー！ねえ！戦おうよ！」

「艦内での戦闘はおやめください〜壊れます」

不貞腐れる神威が後ろに着いて来る

「あり？阿伏兔、すっごい楽しそうだけど、何かやつてきた？」

(…なんですぐ察知するんだよ…)

「地球で仕事してた時に侍と遭遇して戦闘があつたんだよ」

「え!?ずるいつ!!このまま地球に…ダツ!!」

神威にデコピンすると、軽く吹き飛ばす

「イツツタイ!!!ねえ阿伏兔！阿伏兔だけずるい!!」

ぎやいのぎやいの騒ぐ神威の声に耳を片方だけ塞ぐ

「わかつたよ！今度の戦争の時にはちゃんと戦わせてやるから！」

そう言う、『約束だからな!』と言って来る

神威と二人で歩きながら神威の地球のご飯の美味しさなどいろいろ熱弁しているのを聞きながら笑う

―江華と阿伏兔―

自室に戻った阿伏兔は引き出しの中にあつた写真を取り出す。

「……………なんかこう見ると不可思議な光景だな」

江華と阿伏兔、やたらめつたら暴れてブレる星海坊主と何故か、星海坊主と江華の間じゃなくて江華と阿伏兔の間にいる神威が映った写真を見る。

江華が死ぬ前日、珍しく江華から会って話があったという手紙が届き、嫌な予感がしつつも洛陽に行ったのを思い出す。

「阿伏兔、アンタが生まれてから私はかなり退屈じゃなかったし、寂しくもなかった。同類が居てくれるのは私にとっては幸せだった」

「……………」

柄にもなく感謝を話す江華の言葉を黙って聞いていた。

「だから、不死者の先輩として少しだけアドバイスをしないとダメだと思って」

江華は笑いながら寝転がる。

「不死者にとつての死は、幸福なんだ。痛くも苦しくもない。それに、大切な人より早くに逝けるのってこんなに幸せなものなんだ」

幸せそうに言う江華に『死ぬな』なんてとても言えなかった。

「まあ、少し心残りがあるとしたらあなたの嫁さんを見れなかったことぐらいかな、私に義妹が出来たらきつと楽しかっただろうね」

「嫌味か、このすつとこどつこい」

そうツツコミを入れると江華は笑う。

「まあ、あなたがいつ結婚して子供を作るかなんて分からないけど、死ぬときは大切な仲間でも部下でも、甥っ子や姪っ子でもいい。囲まれて死ぬんだよ」

咳をする江華の手を軽く叩く

子供の頃（？）江華が良くやってくれたことだ

「まあ、私が死んですぐこっち来たなら毛根筆り取って追いつ返してやるから、来るのなら神晃より遅く、神威より早めになら許してあげる」

「おつかねえなあ」

そう呟くと江華が笑う

立ち上がって帰ろうとすると…

「阿伏兔。神威のこと頼むわね、あの子の相棒で父のように導いてあげて」

「…任せとけ」

そう言つて手をふる

写真を見ていると扉を蹴破るように神威が入ってくる

「阿伏兔ー！ご飯の用意出来たよー！」

「いや！普通に入つてこい！修理代馬鹿にならないんだぞ！」

そう言つて写真を引き出しにしまい、神威の元に向かう

# 第6話『不穏な気配がする中、仕事っていうのはしづらい』

―阿伏兔―

山のように重なる書類。

そして、やたら増やされる仕事の山

「……………」

→イラつきすぎて無言の阿伏兔

「イラついてるねえ、阿伏兔〜」

神威の言葉に頭を掻く

「明らかに偏り過ぎてんだろ、他の師団はこんなやつてねえのによお」

「まあまあ、そんな怒らなくても俺に回してくればやるよ?」

「侵略戦争だけだろ?」

「分かってる〜」

二人で牢屋のあるところに向かう。

「へえ、コレが元春雨第四師団元団長・華陀ねえ〜お侍さんに全て奪われて今はこんな有



様なんだ」

神威が華陀の牢屋の前に座り込む

「組織の派閥争いで居場所を失い、春雨の資金を横領して名前や顔を変えて地球へ逃亡していたって話だ」

原作にある知識と調べた情報を照らし合わせて伝えると『とんでもないことしたねえ』見つけたのが阿伏兔じゃなくて良かったね』と牢屋を軽く叩く

「おいおい、見境なしに襲う奴だと思ってる？ 流石に節操はあるよ？」

「云業から聞いたよ。前、あんまりにも仕事が多過ぎてイラついて単身で星一つ壊滅しに行ったって」

「いやあれ、星の種族制圧しただけで済んだやつなんだけど」

神威が立ち上がり、牢屋に背を向けて歩き始める。

「おかげで阿伏兔はキレさせたら一番マズイ人間って言われてるの知ってる？」

「いや初耳なんだけど!？」

「それにしても、あの女を連れてくるっていう手柄取られちゃったね。一度挨拶した方が良いかな……侍に」

神威と阿伏兔の横を通り過ぎる高杉を見て内心（うおおお！本物高杉だー！）と興奮してしまいそうになるのを堪える

阿伏兔は神威と阿呆提督が話しているのを部屋の外で待っていた。

(…原作知ってるから敢えて変えること出来るけど、変に変えて違う展開になるのもめんどくさいし、さてどうするか…)

高杉一派と協力するのは確定として、神威が提督になった場合、どうまとめていくがだ。

後々出てくるであろう虚に付け入れられないような組織にして仕事を無くしたい(本命)

「阿伏兔、終わったよ」

そう言っ出て来た神威に『提督なんて?』と聞くと

「阿伏兔が言っただ通り始末しろってさ」

「んじゃあ、明日決行しようか、阿伏兔は他の団員指揮して敵の艦隊を落としてくれ」

「へーい」

神威と別れた後、団員達を引き連れて船に乗る。

まあ、ここまでは知ってたし、敵も増えてたし、まあ砲撃されるし

(まあ、部下はとりあえずひとまとめにしてもおいたし、あっちの艦隊は無人数艦隊だから

平気だもんね……費用が飛んだけど)

無駄に金を使わせた春雨許さん。

「副団長！突っ込みます!!」

「おう！突っ込み!!」

艦隊を突っ込ませ、その衝撃で開いた所から部下達と共に出て行き、神威がいるであろう地点に向かって歩き始める。

神威の気配がする方向に向かって銃を向けて放つ。

「なんだい、やっぱり元氣そうにやってるじゃねえかこのすつとことつこい」

「阿伏兎〜！楽しみ先に取らせてもらったよ〜！」

「団長が楽しそうで何よりだ、まあ、こつから俺も楽しませてもらうけどな！」

そう言つて向かつてくる敵を複数まとめて切り刻む。

動きが遅く見える。

手刀と番傘でバツサバツサ斬つているといつのまにか他の師団もまとめてこちらに味方していた。

まあ、後は神威と高杉が片付けてくれるだろうと思いつていると、神威と高杉がやってくる。

「終わったよ〜これから俺がバカ提督になるからよろしくね阿伏兎。阿伏兎は第七師団

団長再就職よろしく！」

「へいへい、分かってましたよ〜んで？鬼兵隊とは同盟関係でよろしくて？」

阿伏兔の言葉に神威が「うん、タカスギとやりあうのはまだ先。いい情報いっぱいもらうし、ま！なんかあつたらフオローお願いな阿伏兔」と言われる。

ほとんどフオローだと思いが、まあ、今に始まった事ではないので慣れっこだ。

ワイワイする神威を見る阿伏兔を無言で万斉達が見つめていた。

―河上万斉―

鬼兵隊と第七師団が協力関係になってから数ヶ月後、万斉達は鬼兵隊だけで会議を開いていた。

「晋助、阿伏兔殿から師団の情報やら地球の状況についての調査書が送られてきたぞござん」

「…早えな」

高杉はそう言って書類を見始める。

「まあ、基本的に他の師団についての情報の方が多いでござるが…あの男、相当手強そうだ」

万斉は第七師団と協力関係になった事件を思い出す。

あの男の暴れ方はかなり狂気じみていたというか、強過ぎたというか

10人の天人が斬りかかり、次の瞬間には10人全員が殺されているのである。

「数年前にあの男に依頼された星の制圧では単身で、その星に住む種族を制圧。”怪我一つしなかった” ようですよ」

武市変平太の言葉にまた子は『嘘つすよね？その噂、そんなもん本当だったら神威より先に処刑されてそうですけど』と言うと

「実際処刑されたことあるらしいですよ」

「は？」

また子が唾然と武市を見る

「その時はギロチン方法だったらしいのですが、何故か”刃の方を拳で叩き折った”らしいですよ？」

「マジすか」

「マジです。まあ、夜兎には拘束類はあんまり意味無いですかね、特に阿伏兎殿と神威殿は基本的に拘束無理です」

鉄でもなんでもその気になればあの二人簡単に破壊しますよと言う

ー地球へー

(展開早いなあ…)

阿伏兔は鬼兵隊から『お飾り神輿を用意した』という話を聞いて『あ、もう、將軍暗殺篇なの』と思っってしまったのは悪くない。

だって、鬼兵隊と第七師団って基本的にシリアス担当じゃん、無理だよギャグパート出たいけど無理だもん。

年賀状の回で送ってやろうと思ったけど、そういう時に限ってボケ出て来ないんだよね…

「何したんだ」

「アレ將軍でしょ?」

神威が派手に喜喜殴り飛ばした後、完全に勘違いしているのか言ってくる。

「次期將軍だ」

「じゃあ將軍じゃん」

悪党二人が仲良く話しているのを見て阿伏兔は後ろで河上万斉と見ていた。

こうして見ると鬼兵隊の相棒枠って万斉なんだと感心する。

神威と高杉がやって来て四人で歩いてみると……

「確か、敵がいるのって忍びの里だっけ？」

「御庭番だが高なんだか、取り敢えず忍びの里に將軍サマとやらを隠すと思うぜ、現に囃が  
数人確認出来たしな」

そう言うとき「さすが阿伏兔、調べるの早いね」と言ってくる

鬼兵隊と別れて船に乗り、襲撃向かう

案の定、敵の艦隊が複数見えてきて、激しく争っているようだった。

「すごいすごいやってる。たった数人潜り込ませただけで、あんな風になるなんてまる  
で毛じらみだな」

「なにそれ」

「侍以外にこんな強え奴らいるなんて！オラワクワクすんぞ！」

「ワクワクしないで、仲間だからね」

「分かってるよ、今は晋助と競ってるんだ。どっちが早く將軍の首を取るかって」

この船には多分、沖田くんがいるだろう……

(…あ)

派手に殴り飛ばしたことがあったけど、大丈夫だよな？死んでないよね？主要人物だから大丈夫だよな？

そう心配していると、將軍の妹・そちゃん逃げ込んだところから手が飛んでくる。

「姫さま、アレが腸、アレがハツ…アレが…『うわああ！やめてくださいいい！』」

沖田くんが出てきてよしと思っていると、何故かすごい睨まれる。

睨まれるというか警戒されてる

(あー…根に持ってる)

沖田の視線に気づいたのか神威が阿伏兔を見てにつこりと笑う。

「ねえ、阿伏兔、お侍さんと戦った時、戦闘したのってあのお侍さん？明らかに阿伏兔の

方を見てるけど」

「あー…はい、アイツです。結構ボツコボコにしたの」

「アハハハ、やっぱり阿伏兔減給しちゃうよ？」

「分かった分かった！今回はお前に譲るから減給するな！」

「はーい！じゃあ、戦うけど止めないでねー」

「船が落ちそうになったら流石に止めるからな？」

「分かったよ」

そう言っつて勢いよく飛ぶ。

飛んだ衝撃で忍び達を蹴散らす。

(…あー見ても仲間だったんだけどなあ)



まあそこら辺が神威というか

阿伏兔は神威が座っていた場所に座ると

「阿伏兔！本物の將軍の場所をつかんだぞ」

云業の言葉に「了解」と返すと…

「……………」

番傘を構えてカラスを撃ち落とす。

(…アレ、天導衆のカラスだろ)

ここら辺から見ていたとかプライバシーの侵害とか思っていたが、あのカラス、完全に阿伏兔の方を見ていたのである。

天導衆といったら臚であり、臚と言ったら虚である。

嫌な予感の原因は完全に虚だろう。

原作じゃ、虚に同類はいなかった。

過去に江華という不死者の同類はいたが、虚とは遭遇していないのである。

結果、今この場にいる不死者は自分だけであり、同類を見つけた虚がどんなことするか想像つかない。

(少なくともロクなことにならないさそう…)

嫌な予感がしつつも、神威と沖田の戦闘で船が落ちそうになっているのを確認した阿

伏兎は立ち上がり、神威のそばに降り立つ。

「一人でも手に余るバケモンが数人……どうなるかわからねえや」

沖田がそよ姫を舞藏やら愛藏やらおじいさんに気絶させて渡していた。

「おーい、団長、生きてつかー？」

そう言つて屈むと神威がため息をつき『脆い船だなあ、せつかく良いところだったのに』と言う。

「はー？ 良いところ？ 後数十センチズレてたら、はた迷惑なハゲに会うことも出来ずあの世送りだったんだぜ？」

「分かつてるよ、待つて、すぐに終わるから」

「待たねえ、手負いの獣一人なら部下達で十分だ」

沖田が血だらけになりながら刀を構えようとすると……

「待ちな！」

声をかけてきた忍びに部下達の足が止まる。

「將軍の首、テメエらに譲つてやる」

そう言つてマジの生首を神威と阿伏兎の前に置き離れる。

「お前らが探してたのはこれだろ？ これ持つてさっさと消えな」

そう言つて部下が確認するのを見て頷く

(まあ偽物だろうが、ここは下がるか)

「おら、団長帰るぞ」

「ちえ、まあしようがないか、じゃあね、お侍さん」

生首を持って船に戻る。

## 第7話 『不老不死なんてロクなものじゃない』

―星海坊主―

嫁の弟は正直なところ本気を出さなければ鳳仙クラスでまあまあ相手になる。

「パピー!!」

まあかと言つて長く相手になんかしたくないが、今回来たのは神楽ちゃんの危険があつたからだ。

「行くぞ神楽!あのハゲが相手してるうちに!」

そう言つて將軍サマとやらを連れて逃げ出す神楽。

「イツテエ…容赦ねえな」

砂埃の中から煙を上げて出てきた阿伏兔に舌打ちする。

「首の骨やる勢いで蹴り飛ばしたぞ、なんでも再生するのか、便利だな不死者つてのは」  
「首の骨折れたとしても数分の内は生きれるんだよ不死者つてのは、基本的に首刎ねられたつて生きてるしな」

そう言つて首をゴキゴキ鳴らす。

「喧嘩すんなら息子さん所行つてやったらどうだ?あの息子、お前さんとすごい戦いた

いって言ってたぜ」

「俺があつちに行つたら手前は他の奴らに向かうだろうが、馬鹿息子は神楽やあの侍でなんとかなるが、手前は放つたらかしにしたら取り返しのつかないことになるから俺が相手してやってんだよ」

阿伏兔と物凄い勢いで戦う。

(挑んでも挑んでも手応えねえな……大地でも叩いてる気分だ……)

星海坊主の殴打より先に阿伏兔の重すぎる攻撃が飛んでくる。

吹き飛ばされ、壁に背中を打ち付ける。

「ぐっ!?!」

星海坊主の腹に阿伏兔の番傘が突き刺さる。

番傘を掴み、抜こうとするが馬鹿みたいな握力の阿伏兔が握っているせいでなかなか取れない。

「知ってるか? 腹を掻き回される事でショック死するパターンもあるんだ。それこそ怪我やら欠損が多い夜兔でもな」

阿伏兔は楽しそうにしていた。

いつも馬鹿息子の隣にいるときのような表情ではなく、神威のような笑みを浮かべていた。

星海坊主は足で阿伏兔を蹴り、阿伏兔の足を掴むと勢いよく地面に叩きつける。腹に突き刺さった番傘を引き抜きぶん投げる。

江華と阿伏兔が再会した翌日、阿伏兔の事を問い詰めた事を思い出す。

（洛陽）

「阿伏兔の事がそんなに気になるのか……まあ、お前が想像しているようなことはお互いしてなかったよ、私はあの子の姉で、育てたというだけだよ」

「野郎と同じところで暮らしてたんだろ？」

そう心配そうに言うと江華は笑い

「お互い永劫の時を過してると、そういうことは考えないんだよ、子供を作って幸せに生きるとか、それに、不死者同士で子供は出来ないよ、子供に不死の血は受け継がれない。多少子供が頑丈な肉体を得るだけで、不死でもない。だからこそ、お互いそういう関係には至らなかつたさ」

江華は笑って阿伏兔から貰ったお土産を見る

そう言われてしまえば星海坊主も納得せざる得ない。

「というか江華。アイツ……義弟は確か春雨第七師団の副団長を務めてると聞いたが……戦鬪の場に出れば不死者だというのがばれて危険なんじゃないか？」

春雨は海賊だ。

そんなところに不死者が行けばロクな未来が待っていないさそうである。

「…そうだね、今の所ばれていないって言ってたけど…あの感じじや複数回は死んで蘇ってるね」

「!!」

「それでもああしていられるのはあの子の異常性というか、戦闘狂なところとか…まあ、不死者の生き方なんて本人次第なんだ。私はこうしてアンタと生きることにした」

微笑まれて真っ赤になる星海坊主。

江華は煙管に火をつけ阿伏兔が出て行った方向を見つめる

その瞳が明らかに暗い色を落とした。

「阿伏兔」

星海坊主のパンチつてめっちゃくちゃ痛い。

流星夜王鳳仙に並ぶくらいの男だよ、アルタナの残量50%ぐらい切ったし

星海坊主に右腕吹き飛ばされて、再生した箇所を見る  
身体のあちこちから煙出てる

星海坊主は血だらけで、義手の方の手が地面に落ちている。  
腹から血が出ているのを見て、流石に止めるかと感じ取る

星海坊主を殺しても別に構わないが、流石にそれをしたら江華に怒られそうだし、  
星海坊主が拳を振りかざして襲ってきたタイミングで腹に物凄い勢いで拳を打ち込  
む。

「ガッ!!」

口から血を吐いた星海坊主を気絶させてその場に転がす。

死んでしまった部下の服を拝借し、一応の処置はする

「さあてと…団長と合流しますか」

（あ、いっけね、穴空いてる服は目立つからやめるか）

服を脱ぎ、予備の服に着替えると、別の部下からマントを拝借し羽織る

その場から歩いていくと、見えたのは天導衆の船と、高杉達を見限った喜喜がいた。

天導衆の船が飛び上がったのを見送ると神威と合流するために歩き出す。

（…嫌な予感…）

足を止めて船を見上げると、先ほど喜喜を回収しに来た天導衆ではなく虚が見てい



た。

「……………」

睨めつこのように虚を睨むと、船が飛び立つ

(…：他が傷だらけなのに、俺だけ無傷なの流石に疑われるか…?)

鬼兵隊にバレるのは今のところ避けたい。

(…：あえて再生しないのも手か)

血だらけな部分を再生させずに神威の元に向かうと

「あ、阿伏兔く撤退しよう。邪魔されちゃったから」

「おう、こっちは忍びの連中大体討ち取ったぜ」

「流石阿伏兔、仕事が早いね」

気絶しているであろう高杉を鬼兵隊の元まで運ぶと

傷だらけの神威が「あれ？阿伏兔、傷再生させてないの？」と言ってくる。

「ある程度怪我してた方が怪しまれねえだろ」

「そういうもんなあ」

二人で艦隊に戻り、自室に戻り、ため息をつく

神威が医務室に行くと言って居なくなつたので、星海坊主と戦つた時のことを思い出

す。

不死者の同類は久し振りに会う。

自分は江華と違って一人でいた時間が短い。

例え長く生きていたとしても、江華と一緒に生きていたので寂しさ辺りは微塵も感じなかった。

強いていうなら、痛みになれてしまったというか、ギロチン辺りで殺されてから感覚が少しずつ変わったというか…

(…虚は、確か何十年と目玉をほじくりだされたとか、拷問されたって聞いたな…そりゃ八つ当たりもしたくなるわ)

自分は幸いにも夜兎で、生まれつき戦闘能力はあったため無抵抗に殺されることはなかった。

しかし、自分が死なないからと盛大に巻き込み自爆引き起こそうとするなんて少しだけ迷惑な気がする

死にたいなら辺境の星で塾でも開いて細々と死ねば良かったのに

(…まあ、独りで死ぬのは嫌だからって感じでもあるか)

こうして考えると不老不死ってロクでもない。

(…確か、次はさらば真選組編だっけ?)

あの話は割と泣いたしつらかった。

でもまあ、そんなこと言っている暇はない

「副団長！春雨の艦隊が!!」

複数の敵艦隊が第七師団の艦隊と鬼兵隊の艦隊目掛けてやってくる

ここで確か、星海坊主が来るはずだが、あの時ボコボコにしてみましたのでおそらくは来ないだろう。

「流石、分かっているね…ウサギは寂しいと死んじゃうんだよ」

神威がやる気モードになつてのを見て首根っこ掴む

「おら団長。待て待て、一回離れてからやれよ、宇宙空間で放り出されたくねえしな」

そう言う有神威は『敵が目の前にいるのにお預けなんて生殺しだよ』と言う。

「鬼兵隊助けに行ったら烙陽にとりあえず避難するぞ」

「…え？なんで烙陽?」

「あん？燃料が切れかけてるから補給しねえといけねえだろ。それに、烙陽に行くなら必ず星海坊主のやつも来ると思うぜ」

そう言う有神威の目がギラつく。

「分かったよ、阿伏兔の言うこと聞いてあげる。とりあえずシンスケ達を助けに行こう」  
既に敵艦隊が鬼兵隊の艦隊に突撃してるのを見て、神威が部下達を連れて向かう

く神威幼少期く

甥っ子・神威が春雨第七師団に入ってきてすぐ、なんとか反抗期特有の子供で流石に大変だった、

江華から託された手前、そう簡単に投げ出すわけにもいかないし、神威は出来る限り阿伏兔が面倒を見ることにした。

入ってきた当初はずっと何かに怒っているようだったし、余裕がなかった。

「だくから言ったんだよ、神威。一人で突っ込むなって」

ガラガラと崩壊したビル群から出て行く

心臓に突き刺さった鉄の塊を抜く

多分一回死んだけど、これについては急いで蘇生した。

だって神威が自分の下にいたし、下手したら圧死したら困ると思ったためだ。

「一人でやれると思ったんだ…現に数人倒せたし」

「アイツら負傷してたし、油断させて殺すつもりだったんだろ」

神威を左脇に抱えて倒壊したビルから離れると、ビルが倒壊する。

「おら、少しは怪我しないで戦える方法を教えてやろうか？」  
「いらぬ」

余裕のない神威に苦笑いすると神威が睨んでくる。

「…そういうアンタは怪我ばかりしてるじゃん」

「俺はいいの、怪我してもすぐに治るんだから」

そう言つて神威の前を歩くと、神威が後ろを着いてくる。

「……俺は強くなる。誰にも負けないぐらい」

「そうか、星海坊主に勝ちたいんだろ？」

「……アンタだつて、母さんから頼まれたから俺の面倒見てるんだろ…もう、子守は……」

拳骨を神威にお見舞いすると、地面にめり込む

「別に嫌々でお前の面倒なんて見てねえ。好きで面倒見てるんだよこのすつとこどつこ

つ」

「………」

拳骨された事に困惑する神威の前に屈む

「神威、何後悔してるかなんて分からないが、自分で選んだ道だろ、そんな暗え顔してねえで、顔を上げて歩け、下見て歩いてたらどこ突き進んでるか分かんなくなるぞ」

神威の頭を撫で『なんでも付き合つてやるから』と言つて笑う

神威はそう言って阿伏兔の背中を見つめていた。

それから神威は少しずつ努力しているようで、12歳ぐらいには阿伏兔の知っている神威になっていた。

強さを追い求める夜兔の顔になっていた。

## 番外編 『騒動後に出会おうと会話がしづらい』

―阿伏兔―

吉原の一件から数ヶ月、阿伏兔達は地球によく来るようになった。

といつても歌舞伎町街で仕事する事が多いが、部下達が吉原で女遊びしたいと言ったりしたので自由にさせていた。

「あそこ一応、第七師団の管轄になったけど、本当に新しい夜王とか作らなくて大丈夫？」

神威の言葉に『あの街ほつといても勝手に自衛してくれんだろ』と返すと「ふーん、そういうもんかなあ」と返す

「ねえ阿伏兔、ここの店寄らない？ 食べ放題とかやつてるよ」

「…アンタ、それで前の店のモン大抵食い尽くして出禁になってただろうが」

「あんなチマチマした料理でお腹一杯になるはずないじゃん」

腹の虫がやかましいぐらいに鳴り出した神威に釣られるようにお腹が鳴ってしまつたので赤面しながら、食べ放題の店に入ることにした。

まあ、二人で入ったのだが、阿伏兔自身も腹ペコだったので大量に食べてしまい、結

果的に出禁になった。

「……………」

「阿伏兔も人のこと言えないじゃん」

マントを肩に担ぎながら歩く神威の一言に阿伏兔は無言になる。

「そういえば、母さんも阿伏兔並みに食べてたなあ、不死者つてあんな食べるの？」

「…少なくとも、毎日あんなに食わんわ、毎日あの量なお前さんぐらいだわ」

「えー？あんなに食べてないよー？」

「嘘つけ、その大食らいの血縁がアンタの中にも流れてんだぞ？」

二人で話しながら歩いていると、吉原が騒がしくなっていた。

「なんかあったのかな？」

野次馬に紛れて神威がどんどん中に行くのでため息をつきながら着いて行く

「微妙に見えない」

神威がびよこびよこ跳ねているのを見ると、両脇抱えて持ち上げる。

「……阿伏兔。それ素でやってんの？」

「？」

170センチも決して小さくはないが、人混みがすごい中、阿伏兔でさえ僅かに背伸びして見えるぐらいなのだ。



「…善意からが一番タチ悪い」

「は？」

神威を下ろすと

「なんか騒ぎがあつたみたいだね、近くで見してみる？」

「…喧嘩すんなよ」

「アハハハ」

「いや、否定して？」

少し高いところになると、どうやら火事でもあつたのかいろいろ燃えていた。

「なんか糸が無数に張り巡らされてるね、なんか闘争でもあつたのかな？」

（…あ、糸つてことは地雷亜との戦いでもあつたのかな）

「見に行つてみる？」

「やめとけやめとけ、面倒なことになるぞ」

そう言ううと笑顔で『じゃあゴハンだけ食べに行こうよ』と言つて阿伏兔の腕をひつつかむ

「あつづね！なんでそんな積極的なんだよ！」

―神威―

「あ、少年。久しぶり」

「……………」

少年・晴太は突然現れた神威と阿伏兔に驚き固まる

「おーい？少年ー？」

「…アンタ、あん時やったこと忘れたのかよ」

「あ、そつか、大丈夫大丈夫。俺も阿伏兔も戦うために来たわけじゃないから、なんか食事処ないかなと」

「お、お店…」

晴太が困惑していると車椅子の音が響く

「晴太。お客さんかい？」

そうやってやってきた日輪は神威達を見ると、怯むことなく笑顔で接客してくる

「お店なら一件。用意出来るけど、そこで構わないかい？」

「なんでもいーよ、沢山食べれるなら」

「そうかい、なら案内するから着いて来てくれ」

日輪の神経の凶太さに感心しているのか、阿伏兔が「へえ」と呟いていた。

日輪に案内されて着いて行ったのは普通に豪華な所で、運ばれて来た食事を食べていると……

「だから！ 違うって言うてるアル!!」

「ブベリアアア!!」

隣の部屋から飛んできた銀髪のお侍さんが阿伏兔目掛けて倒れてくるが、ひよいつと避けた阿伏兔が御膳を持って横に移動する。

「げっ!!」

神楽が神威を見てそう呟く

「うるさい客が入ってきたな、あんまりうるさくすると殺しちゃうぞ?」

「な、なんでお前がここにいるアルか!!」

「どこにいようと俺たちの勝手だろ、馬鹿妹」

「……………」

「誰が！ 馬鹿妹ネ!!」

「か、神楽ちゃん……」

メガネの少年が慌てながら神楽を止める。

阿伏兔は我関せずなのか素麺を黙々と食べていた。

ある程度お腹いっぱいになり、立ち上がると

「馬鹿妹。弱い奴に興味なんてないけど、食後の運動の相手してあげる」

「そう言つて神楽に殴りかかる

!!!」

神楽が大慌てで防御するが、容易く吹き飛ばされる。

「神楽ちゃん!!」

メガネの大声が聞こえてくる

(阿伏兔も機嫌良さそうだし、ここはとりあえず半殺し程度にしとくか、あんまりやり過ぎると阿伏兔のきつつい拳骨が飛んでくるだろうし)

神楽は正直言つて弱すぎるため、加減しないとすぐに死んでしまうだろうし、阿伏兔も江華の娘だからか『喧嘩するなら殺さない程度に』とかよく言つていた。

ー阿伏兔ー

吉原でご飯を食べていると神威と神楽が戦い始めたのを見てため息をつく

幸いにも神威は殺す気で挑んでいないので慌てている新八を見て止める。

「変に割り込んだら団長に殺されるぞ、やめとけやめとけ」

そう言つて食器を置くと新八がビクつく

「ウサギがじゃれて遊んでるだけだ」という

「…アレでウサギがじゃれてる？ 狂犬にしか見えねえけどなあ」

銀さんがそう言ってくる

何故か警戒しているが、明らかに阿伏兔の方をみて警戒しており居心地の悪さを少し感じる。

すると、無線に連絡が来て部下からだつた。

阿伏兔は立ち上がると神威の方に歩いて行く

「おら、団長、帰るぞー！」

背中に視線を感じながら進むと、傷一つ付いてない神威が「了解」と返してくる。

主人公といろいろ話してみたかったが、吉原炎上篇の後すぐに話すのはさすがに、会話がしづらかつた。

神威と共に艦隊に戻ると、神威が早々に「シンスケに会ってくる」と言つて鬼兵隊本艦に行つてしまう。

「相変わらず変わりませんねえ」

低音ボイスが聞こえて来て振り向くと、そこには河上万斉と武市変平太がいた。

「たくっ…オタクん所のリーダーとえらい気があってな…仕事放つたらかして会いに行く始末だ…まあ、保護者としたら部下達以外に話し相手が出来たのは嬉しいけどな」  
神威を幼少期から見ているが、部下達以外と話しているのを見るのは少しばかり嬉しい。

これが父性なのかなんのか分からないが

「次の計画についての打ち合わせを行ってもよろしいですか？」

「おう、歩きながらでいいか」

「構いませんよ」

「……」

武市と話しながら進む。その後ろにいる無言の河上万斉もだいぶ慣れてきた。

春雨の艦隊に近づいてくると、武市が「それでは計画に何かありましたらご連絡お願いします」と言う

「おう、ウチの団長が何かやらかしたら言ってくれ」

そう言って手を振って艦隊に戻って行く

「どうしました？」

万斉に問いかける武市

「いや…あの男、恐ろしいぐらいの無音であつたでござる。リズムが何も聞こえて来な

かった。不気味な男と思つたでござる」

そう言つて万斉は鬼兵隊の艦隊に向かつて歩き出す。

万斉はあまり阿伏兔のことを好ましく思つていなかった。

いつも平坦としている音が聞こえるのに、時々、異常なぐらいの音が聞こえてくる。掴み所のない男だと

―虚―

烙陽に向かう道すがら、虚は同じ不死者である「阿伏兔」の情報を眺めていた。

同じ不死者でありながら、不死だとバレずに隠し通せている事実。

少なくとも、自分が知れたのは星海坊主との戦闘をしている際に死から蘇っているの  
をみて確信に至つた。

「……宇宙は広い、まさか、私と同類がいたとは」

「……」

朧が後方に立って話を聞いていた。

「確か彼は惑星・徨安のアルタナから生まれた不死者でしたね」

「…はい、調べた限りでは」

「それならば、地球産と宇宙産の違いを確かめることが出来そうだ」

阿伏兔が執心しているであろう神威の情報を見て嗤う



## 烙陽決戦篇く銀ノ魂篇

## 第8話 『二人の不死者』

―烙陽へ―

坂本辰馬は鬼兵隊と第七師団の船が敵艦隊に攻撃された後、地球に落ち延びた鬼兵隊の残党達と共に烙陽に向かっていた。

「晋助殿は第七師団によって保護されたところは確認しました」

武市の言葉に銀時はやる気がないのか「じゃあ、そのうち帰ってくんذار」と返す。

「それが第七師団は燃料不足のため、一時的に烙陽に撤退。それを追うように天導衆率いる春雨が向かったとの事です。このままでは袋叩きにされるのが関の山でしょう」

「それに銀時。第七師団の副団長は先生と同じ不死者という話ではないか、あの男が唯一、不死者を殺す手段を知っているかも知れんからな」

桂の言葉に『不死者が自分の弱点を話すと思えねえーんだけど』と言う

「まあ、それはそうだとしても、不死者であるのならば死ぬ方法を必ず探しているはずだ」

永劫の時を生きているのならば、それを苦に思い、死ぬ方法を探していてもおかしく

ないと頷く桂に、銀時は欠伸びながら

「ワカンねえよ？ 鬼舞●無●みたいにひたすら生に執着してるパターンかもよ？ 生き残るためなら部下を踏みつけても良いぐらいの（規制）かもしれないよ？」

「鬼●辻●惨は不死者ではないだろう」

「…あの、銀さん、桂さん、すぐに流行りに乗ろうとするのやめてください。後、そのネタは話しすぎると怒られますよ」

「どつちでもいいアル」

神楽が酢昆布を食べながら言う。

「まあ、何はともあれ第七師団と合流するんだろ。話つくかね？ 馬鹿兄貴とかその他の団員さんとか話してくれるとは到底思えないんだけど」

「そのための鬼兵隊だ。第七師団と同盟関係を結んでいる高杉ならば話はつけやすいだろう」

桂が腕組みして頷く

―神楽―

それから一行は烙陽に向かうために出発した。

神楽は一人、窓から宇宙を眺めながら考え事をしていた。  
マミーの唯一の家族。

銀ちゃん達から聞いた不死者の存在。

叔父がそうなら、母もそうであったということ

(どうしたら良いのか分からないネ…)

馬鹿兄貴が家出した理由も、不死者であるマミーをパピーが死なせてしまったせいなのか

一人で悩んでいた。

(…分からないネ…一回馬鹿叔父に聞かなきゃ)

神楽は顔を上げて部屋に戻るために歩き始める。

『マミー、すごく叔父さんとなかよしアル』

烙陽にいた頃、よく江華の元を訪れていた叔父・阿伏兔は仲良く江華と話していた。

星海坊主が何処かに行っていない時を見計らってよくやって来ていた。

『……母さんの弟だからな、仲良くて当たり前だよ』

『にいちちゃんは、わたしのこと好きアルか?』

『……妹としては思ってるよ』

『よかったアル!』

『…ところで神楽。何持つてるの?それ』

『叔父さんからもらったアル!ちきゆうのお菓子みたいネ!』

神威に「食べる?」と差し出すと「要らない」と返ってくる

神威が居なくなつた後、マミーは神威の事を心配する素ぶりは見せなかつた。

家出したことに怒っているのかと思つたが、実際は違つた。

『神威の事は阿伏兔に任せてあるから大丈夫だよ、勿論、大変な場所に行つてしまつてい  
るから不安なものもあるけど…あの子…阿伏兔のことだ。託された約束は必ず果たして  
くれるさ』

江華の笑顔に神楽は黙つていた。

ー阿伏兔ー

烙陽に着き、鬼兵隊と共にかつて江華達が暮らしていた地点に隠れていた。

「シンスケ、まだ昏睡状態なのー?眠り姫だねえ」

神威の言葉に阿伏兔は『仕方ねえだろ、敵襲撃だつたんだから治療に必要な機械大体  
もぎ取つて来ちまつたんだから』と返す。

「さてさて阿伏兔。どうやら敵さん達もかなりやって来ちゃったみたいだよ」

神威達の視線の先には複数の春雨の艦隊がいた。

「絶体絶命の危機にお気楽だな、このすつとこどつこい」

「だって楽しみじゃないか、どれくらい遊べるか、阿伏兔も残機×1000ぐらいあるだろう？」

「いやいや、蘇生するタイミングとか間違えると無間地獄だからね？マ●オとかじゃないんだよ？」

「亀の甲羅踏んできたから大丈夫だろう？」

「どつちかと言うと亜●の方だからね」

不死者となって気づいた事は復活するタイミングの重要性だ。

勿論、虚のように腕を千切っておいて、そこにアルタナを送っておき、その腕を安全地帯に置いておけば完全再生は出来るが、同時にデメリットも大きい。

短時間ですぐに再生しないといけないので、すぐに死んでかなり経ってから蘇るみたいな事をすれば記憶に問題が起こりかねないし、最悪、別人格みたいな復活をしてしまう可能性だってある。

全くもって良いところがないのだ不死者って

「さてと、阿伏兔。シンスケのこと頼むよ」

そう言つて歩いていこうとする神威に「へいへい」と手を振る。

(……神威には星海坊主の場所は言つておいたし、虚も同類がいるとなればそつちにくるだろうし……大丈夫……だよな?)

虚が星海坊主の方に行くのはなんとしても防がなければならぬが、こつちに来る分はまだいい。

「阿伏兔、いいのか? 団長に行かせて」

部下の言葉に『うんまあ、平気だろ。家族喧嘩させてやれ』と言つて部下達を見る  
こうして見るとみんな野郎で暑苦しいなあと思つたが、長年一緒にいた部下達だ。

何人か神威に殺されかけたりしたが、その度にサンドバック阿伏兔になつたおかげで  
今のところ誰も死んでいない。

それ故に個々がバカみたいに強いので助かる。

まあ、原作じゃ全員モブみたいな扱いされてたけど良い奴らだよ

「さて、お前らはタカスギくんの護衛と燃料補給してろ。俺はこの辺の敵を駆逐してくるから」

「副団長!」

足早にその場からいなくなると、遠くの方で天導衆の船が降り立っているのをみてため息をつく

「……なんだかな……きて欲しいんだが来てほしくないんだよな……」

傘を背負い、こちらに向かつてくる奈落の一行を迎え撃つために地面に降り立つ。

「ハア……」

深くため息をついて傘を勢いよく振るうと奈落一行が吹っ飛ぶ。

(よいしょっ！)

不死身軍団化する前なので割と倒せる。

倒しながらかなり離れた地点から爆発音が響き渡る。

多分、銀さん達が来ているのだろう

そんな心配がする中、顔を上げるとそこに現れたのは天尊衆の巨大な船。

そして、そこから現れるラスボス・虚

(ああ、最も会いたくなかった存在登場だ……)

虚は不気味に笑ってはいる。

「この宇宙は広い。まさか、私と同じ存在がいたとは、初めてお会いします」

「俺ア別に会いたくなかったけどなあ、このすつとこどつこい、嫌になるな」

虚がゆつくりとやってくる

それをみて少し警戒を強める。

「私は一度会って話してみたかったですよ、貴方と、同じ生物の理から外れた者として」

虚は楽しそうに話していた

(…俺は全ツ然楽しくないけどね！)

虚が瞬く間に移動して攻撃してくる。

―星海坊主―

神威との親子喧嘩は熾烈を極めた。

両腕をもがれかけたが、坂田銀時の割り込みにより親子喧嘩は中断になり、銀時と神威が戦っていた。

「壁は…後何枚だ」

侍というものはそういうものだった。

自分より強い相手でも己の信念を守るためならば、臆することなく戦う。

そこに守るものがあるのなら、自分より強大でも剣を向ける

銀時に吹き飛ばされ、気絶した神威の手が動き出す。

「…アイツ。呑まれやがった…」



「アレは…神楽ちゃんと同じ…」

夜兎の血に吞まれた神威が暴走し始める。

己も戦おうと動こうとした時…少し離れた所から爆発音が響き渡る

(…アレは…!)

阿伏兔と何か…虚とかいう江華と同じ不死者が戦っていた。

神威達からだいたい離れた距離にいるという事は…

(…あの野郎。神威を守るために自分が囮になったのか!?)

いつも一緒に行動している阿伏兔が居なくて、神威単身でこちらに来ていたことに疑問を感じていた。

神威は神楽を殴る事が出来ず、気絶しているのを見て立ち上がる

「星海坊主さん!動いたら…!」

新八君が止めてくるが、動かなければならない。

「あの野郎…!自分を囮にして神威を避難させやがったな…!」

神威にもぎ取られかけた腕を抑えながら立ち上がる

「え…?」

「阿伏兔の方に別の不死者がいる…!このままじゃ、阿伏兔の奴。下手したら死ぬ!おい!馬鹿息子!お前の大事な相棒が死ぬぞ!!起きろ!!」

「その大声に神威が反応する。  
……阿伏兔……」

## 第9話 『異なる二人』

―阿伏兔―

ラスボスを倒すのはいつだって主人公で脇役はせいぜいやられ役だ。

ラスボスの強さを際立たせるための踏み台に過ぎない。

だからこそ、自分は主人公のすごさを際立たせる脇役にしなければならない。

(イツツタイんだよ!!容赦なさ過ぎっ!)

虚に吹き飛ばされ、背中をぶつける。

「不死者を相手にするのがこんなにも楽しいとは初めて知りました」

なんかどつかで聞いたことある言葉に阿伏兔はため息をつきたくなる。

「俺は嫌だけどな!お前さん人の話聞かないタイプだろ」

虚の腕をもぎ取る事に成功したが、代わりにこつちは心臓を突き刺された。

一瞬でアルタナを送って回復したからまだマシだが、これを連発されると取り返しの

つかない事になる。

お互い首を飛ばして再生するというグロテスクなシーンも繰り返した。

どっちが再生させるの早いか競いたくもないのに競うことになったし

(…引き際間違えるとヤバイな…)

そもそも逃してくれるのかとか思った。

「!」

虚が飛んでくる。

刀をなんとか避けたが、次の瞬間には腹に虚の拳が飛んできた。

「っ…!」

(コイツ…!夜兎並みのパンチ力持ってるし…!)

拳の軌道をずらしたせいで、腹を突き抜き、血を吐く

番傘を頭部めがけて放つが、軌道を逸らそうとしてくる虚の手の動きが見えたので、

番傘の攻撃方向をずらす。

虚の肩にあたり血が吹き出す。

にも関わらず痛そうな素ぶりは見せない。

虚を蹴り飛ばす

「思ったより苦戦を強いられましたね…さすがは不死者なだけがあります」

苦戦を強いられたとか言っているが、全ツ然顔は余裕である。

阿伏兎は目の前にいる存在を見る

このままじゃラチが明かない。

そのうち、星海坊主や神威達がきてしまう。

(…アルタナの結晶石を心臓に打ち込んで、あの千切れた腕を始末すれば行けるか…?)  
殺すことを視野に入れる。

不死者の殺し方はふた通りある。

一つは原作でやった通りの展開。

もう一つは違う星のアルタナの穴に突き落として殺す方法。

二つとも奇跡が重ならないと不可能な展開だ。

後者のアルタナの穴に突き落として殺す方法なんて、最悪、その星のアルタナに適応してしまえば意味がない。

虚が走って向かってくるのを避けずに原作の星海坊主のように突き刺される。

「お前さん、地球生まれだったよな。地球生まれの不死者に他の星のアルタナは毒ではない。このまま心臓と一緒に握り潰してやる」

「貴方を両断するのとどちらが早いと思いますか？」

「さあな、そんなの知らねえよ！」

そのまま、手に握っていたアルタナの結晶石を手に心臓を握り潰す。

不敵に笑いながら倒れる虚を見て、腹に刀が突き刺さったまま、虚の腕めがけて撃つ。

消し炭になり、辺りを見渡すと…

「つぐ……！」

腹に突き刺さった刀を抜き、地面に倒れる

「……おいおい、冗談だろ……？」

腹に突き刺さった刀にアルタナが塗られでもしていたのか、傷が全然回復しない。

そして、あろうことか虚が勝手に再生していた。

「やはり、貴方でも私は殺せませんでしたか、しかし、久しぶりに命の危険を感じました」

（マジかよ……寸前で指一本から再生したのかよ……！バケモンかよ……）

「阿伏兔!!！」

星海坊主の声が聞こえてくる。

「おかげでアルタナが底をついてしまったようだ。ここで、不死者の死に行く様を見ていたかったのですが、そんな時間はありませんので下がらせていただきます」

虚が居なくなり、阿伏兔は仰向けになる。

「……さすが、ラスボス……だなあ」

死にたい癖に再生に関しては人一倍早い。

（……これが死、なのかな……）

不死者として長いこと生きていたが、死ぬ瞬間は度々あろうとも次の瞬間には生き返っている。

アルタナが底をついている今なら死ぬるのだろうか？

『阿伏兔』

江華の声が聞こえてくる

(…幻聴か、お迎えか)

神威達が走つてくるのが分かる。

団員達の「副団長!!」と叫ぶ声もする。

そんな中、江華が上から覗いていた。

見間違うはずもない、江華だ

『もう終わりかい？お前にしては頑張ったじゃない』

連れて行くのかと問いかけると江華は笑い

『どうしたい？私はいつだって迎えに来る。心残りとかまだあるだろ？』

(…心残り…)

誰かが起こしてくる

「阿伏兔…お前がこんな所で死ぬタマ？いつもみたいに蘇ったオチにしてくれないと困るよ…」

神威の声が聞こえてくる

『まだ神威は、お前を死なせたくないようだよ、その手を振りほどいて私のところに来た』

いならしやうがない』

江華は星海坊主達に見せる笑顔を向けてくる。

『死ぬ瞬間はいつだって選べる。あの男のようにワガママに生きてても良いんだよ』

(……………)

江華は阿伏兔の無言に微笑み、頭を撫でてくる

『私はまだこつちで待てる。今来なくても構わないさ、神威の事をよろしくね』

そう言つて目の前から消える

少し横を見ると、ポロポロの神威が少し泣きそうになっていた。

「……………親子喧嘩、できたか、このすつとこどっこい」

「おかげさまでね」

「……………仲直りは……………」

「さあね、そんなに知りたいなら生きなよ、阿伏兔」

「……………」

「…阿伏兔」

「…………アルタナ切れた」

「…戦艦に着けばあるからそこまで持ちこたえて」

神威の周りに団員達と他の師団がいるのも分かる



神威の優しい言葉に少し笑いたくなる

(…大きくなったなあ、神威)

阿伏兔を支える腕は大きくなっているし、180cm台を軽々と肩に手を回して歩けるなんて大きくなった。

眠くなり、目を閉じる

―星海坊主―

神威と阿伏兔が戦艦に戻ったのを見送り、自分は神楽を迎えに歩いていく。

不死者の江華ですら死なせてしまった大バカ者だ。

あの馬鹿息子は不死者である阿伏兔を死なせないために躍起になっている。

不死者は簡単には死なないが、アルタナが底を尽きれば死ぬということ、そして、別の星のアルタナは不死者にとっては猛毒に他ならないということ

「神楽。墓参りは済んだか？」

そう言つて雨に当たつていた神楽の方に傘を差し出す。

「…終わったネ」

そう言つて立ち上がる

「…パピー」

「ん？」

神楽は悲しげな顔で振り向き

「…マミーは幸せそうだったアル。パピーはマミーを連れ出したこと、後悔してないアルか？」

惑星・徨安から江華を連れ出し、結果的に死なせてしまったことを

「ああ…後悔してないさ。俺は、江華に出会い、お前達に出会えた。そこでアイツが死んでしまったとしても後悔なんてしてないさ」

江華と一緒に過ごせた時間は大切な記憶だ。

たとえ、もう会えないとしても

「帰るぞ、神楽」

「分かったアル」

そう言つて立ち上がる。

## ―数年前の話―

天人と人間が戦争を繰り返していたとき、阿伏兔は鎖国を解いてすぐに地球に降り立っていろいろ巡っていた。

(…いやあ、しつかし、主要キャラは流石にいないか)

歌舞伎町辺りに行けばいるのだろうが、そこまでするメリツトもないので、歌舞伎町ではない街を歩きながら物珍しい物を買帰ろうとすると…

「おい、天人がいたぞ!」

「天人だ!」

(相変わらず治安悪いなあ、……)

鎖国を解いてすぐのこの国には天人狩りなんてものが流行っている。

天人を快く思わない人間達が剣を片手にやってくる。

いつものように拳骨かましてその場から立ち去る。

すると、無線が入り『至急、歌舞伎町に行つて欲しい』と頼まれ、渋々、とあるビルにむかう

「要人暗殺なんてめんどくせえこと春雨に回すなよなあ……」

阿伏兔は撲殺した後、手を綺麗にティッシュで拭き、その場に投げ捨てる。

証拠を残すなどか言われたが、それは同じ人間で同じ惑星に暮らしていた場合に適応されることだ。

ビルを出て歩いていると、通報でもあったのか、遠くから見廻組の隊員が走ってくるのが見える。

阿伏兔は少し離れた場所を歩く

「……………」

通り過ぎた阿伏兔を黙って見つめていた信女に気づかず

## 第10話 『戦いの最中だって休憩は必要』

―阿伏兔―

第七師団に保管してあったアルタナによって回復した阿伏兔は、復活した時から部下に破壊された艦隊の内容が書かれた書類を渡される。

その中に、明らかに先の戦争とは違った内容の中身にブチつとくる  
スツと立ち上がり野郎達が騒ぐ声が聞こえる方向に歩く

扉を軽く開けると、そこはどんちゃん騒ぎ

夜兔やら攘夷志士やらごちゃ混ぜになって騒いでる

(…あれー？おつかしいな、銀さんがいるぞー？あれ？)

銀さんが星海坊主とわきやわきや飲んでるのをみて辺りを見渡すと、何故か戦艦が  
ポツコポコである。

神威はふてくされているのか、地面に座ってジュースを飲んでいた。

そして、何より呼ばれてない奴らまでいるし

「ふ、副団長…」

部下の静止を聞かずに歩き始める。

「このアルタナがあれば俺の髪は復活する!!」

髪の毛を生やした星海坊主にブチっときて、思いつきり頭部を鷲掴む

ついでに銀さんも掴む

「人のアルタナで何してんだ!!!」

「なんで俺もおお!!?」

思いつきりテールブルに叩きつけると、シリアス回でないのか、単に力を割と抜いてやったので星海坊主が頭から血を噴き出しながら「やっ」と起きたか愚弟!!アルタナ貸してもらったぞ!」と酔っ払っている星海坊主が言ってくる

「育毛剤じゃねえんだよアルタナは、勿体ない使い方すんじやねえボケ」

星海坊主の毛根をむしり取ると「ギャアアアアア!!何しとんのじゃ!この義弟!!」と叫ぶ

「ねえ、オニイサン?なんで俺まで机に叩きつけられたの?なんで無視されてんの?」

「そこに掴みがいのある頭がいたから」

「何その通り魔みたいな理由?!」

ぎやいのぎやいの騒ぐ阿伏兔達に神威は離れた所から眺めて少し微笑む

「馬鹿叔父起きたアルな」

神樂が神威の横に来て言う。

「お前も叔父に会いたくて来たの？」

「そんなわけないアル。馬鹿叔父と話したこと数回しか無いネ、イメージはお土産を定期的にくれる大阪のおじちゃんネ」

「…オオサカ？」

「お前ギャグ路線無理アルな」

神樂は隣で彼らの様子を眺めて笑っている神威を見て無言になる

「…お前が心配で死ぬに死ねないアルな、あの馬鹿叔父も」

「え？それどういふこと？俺馬鹿にされた？」

「そうアル」

「一丁前にお兄ちゃんの悪口を言うなんて、頭が高い」

デコピンをするとゴチンと鈍い音が神樂の額から発生する

「イツツタア!!何するアルか!!馬鹿兄貴!事実を言つたまでネ!!」

「神樂ちゃん!あんまり暴れると船壊れるよ!」

新八の声も虚しく、神威と神樂が兄妹ゲンカを始めると

「船が壊れるだろうが、落ち着け!」

「ゴフア!」

神威の脳天にかかと落としを食らわせる阿伏兔。

神楽の脳天に拳骨をお見舞いする。

「あの一？阿伏兔さん？貴方のかかと落としが何より戦艦にダメージ喰らわせてますけど？神威くんめり込んでますけど」

銀時のツツコミが入る

「これぐらいやらねえとこの馬鹿止まらねえよ、このすつとこどつこい」

「いやいや、気絶してるからね？神威くん。せつかく傷治ってたのに、今のかかと落としでえらい傷作ったと思うけど」

く数時間後く

それぞれの艦隊に戻って行ったのを見て安心して、阿伏兔は自室のソファーに座る。

銀時達に不死者についての話をしたのだが、結局、どういう結末を迎えるかは彼ら村塾の選択次第だろう。

(…不死者って括りなだけで出しゃばるワケにはいかないしな)



高杉が、銀時達がどういふ結末を迎えるか正直知っているが、彼らを救済して良いのか悩むようになった。

阿伏兔に転生してすぐならば、救済も視野に入れて動いていたが、そこまでするメリットがないように思えてきたのだ。

結局、江華を助けなかったのも、彼らの選択を無下にしたくなかったからだ。

(…アイツらにはアイツらの人生があるしな)

自分が背負えるものなどが知れている。

自分が持つと決めたのは春雨第七師団と江華との約束だけだ。

「おい、義弟」

暗い廊下から現れたのは酒を片手に持つてきた星海坊主だった。

「まだ酒飲むのかよ」

「いいじゃねえか、テメエと一緒に飲んでみたかったしな」

そう言つてソファアに座る。

向かい側に座つた星海坊主は酒を注ぐとそれを飲み始める。

なんとなく阿伏兔も飲み始める

窓から星々の光が入り込んでくる。

(…なんか奇妙な光景…)

星海坊主との会話に悩んでいると、星海坊主から口を開いてくる

「神威のこと、まず礼を言う。俺の代わりに面倒見てくれて有難う」

「あぁー…まあ、手間のかかる悪ガキだったぜ？人のことサンドバックにするわ、割とエゲツないし」

「そうか」

そう言つて笑う星海坊主

「でもまあ、一人で春雨にいるよりはるかに楽しいな、妙なところが江華に似てて笑えてくるし」

神威との生活は案外楽しかった。

確かに、苦勞することも山のようにあつたが、やっぱり身内がいると心許せるところがある。

「まあ、一緒に歳は取れねえがな」

周りがどんどん歳をとつていくのに自分だけが若いままなのも始めの頃はつらかつた。

古参幹部の一人は年齢を理由に前線から退いた時、阿伏兎はいつになったら引退するんだという話になつた時は肝が冷えた。

（ただでさえ、年齢不詳設定貫いてたし、なおかつ不死者だつてバレたらやばかつたか

ら、はぐらかす理由作るの一丁前になったな…)

物思いに耽っていると、星海坊主が「引退するんなら地球に隠居したらって神楽が言つてたぞ」と言つてくる

「嬉しいねえ…んじや、考えてみるわ」

二人で酒を飲むのも良いなど感じていた。

―逆転兄妹。パロ―

原作の流れで言えば、神威が春雨に入り、神楽が地球の万事屋に入る流れだったはずだが、春雨に来たのは娘の神楽の方だった。

「私を連れて行けネ」

(…あれ？神楽の方がくるの？これって逆転。パロみたいなことになってる?)

「女の子が入る所じゃねえよ？春雨は、野郎の巣窟だぜ」

「構わないネ」

神楽の目を見ると、原作神威のような険しい目をしていた。

「構うわ、野郎達しかいねえんだぞ、どうなるか分かってんだろ？」

「黙らせれば良いアル」

何を言っても諦めなさそうな神楽にため息をつく

「どうして春雨に入りてえと思っただ。お前さんなら親父さんがいんだろ」

「……マミーが死んでから帰る頻度が減ったアル。それに、あの馬鹿達はマミーの看病をロクにしなかったネ、神威なんてマミーを捨てて消えたアル。そんな奴らをもう待つのは嫌ネ」

「……………」

反抗期の酷い状態に頭をかく

神威を面倒見る準備は出来てたが、こう、ヒロイン枠である神楽を面倒を見る準備は出来ていなかった。

「良い場所紹介してやるぞ」

春雨などよりもというと、神楽は小さい声で何か呟く

「……阿伏兔と一緒に良いネ」

（…マジかあ…そうなるか、うん、江華の弟って形になってから予期はしていたけども）  
「連れて行くヨロシ」

そう言つて船に乗り込む神楽に「へいへい」と言つて着いて行く  
(……団長の役どうしよ……)

「……」

数年後、神楽はみるみるうちに大人の女性になつた(て言つても大きくなつたのは胸と身長だけ)

と言つても女として春雨に來た以上、それなりの危機はあるわけで、その度に神楽が制裁お見舞いしたり、いろいろしたおかげで男の影などない。

「……まあ、一番ヤバいの阿伏兔アルからな」

「おいおい、団長には言われたくないやい」

結局神楽は春雨第七師団団長になり、夜兔達を引つ張つて行つてゐる。

阿伏兔と神楽は春雨の艦内を歩きながら今後のことを話していた。

「んで、今後の予定だけど、地球に行つて鳳仙の旦那を説得するつて流れだが、お前さんほんとうに行くのか? 吉原に」

「行くつて前から言つてるアル。うるさいネ阿伏兔は」

「当たり前だろ、あそこは遊郭・吉原だぞ、愛憎渦巻くなんたらドロドロな場所だぜ。」

そこに女であるお前さんが行くなんてよろしくねえよ？教育上も」

「…そんなの、春雨自体が教育によりしくないヨ」

「まあ…そう言われればそうだけどき」

「わかつたら連れて行くアル」

「へーい、なんかあつたら言えよ」

「だからしつこいアル」

「へいへい」

吉原に来た阿伏兎たちは鳳仙の帰る気なさそうな状況にため息をつく

「不機嫌アルな」

「そりゃーね、一人死んじやったからね」

腕を再生させながら神楽に言う

鳳仙と神楽が戦い始めたのをみて止めた云業が死に、結果的に追い払われるように退場した神楽達。

「云業に不死者の血を与えてたらマシだったんじゃないアルか？」

「いやいや、死ぬと思うよ？腕とか足とか頭とか溶け落ちるよ？」  
「…そんなマグマアルか」

「マグマだよ？不死者の血は不死者に流れるから安定してるんであって、それ以外の体に流れたら溶けるからねえ」

再生し終わったのをみて立ち上がる

「さて、もう鳳仙の旦那は帰る気なさそうだし、俺達も戻るか？」

そう言うのと神楽は外を見て「あの馬鹿兄貴がいたアル」と言う。

神楽のポジションに神威がおり、万事屋一行になっていた。

「ちよつくら馬鹿兄貴いじめて帰るアル」

そう言うて傘を持ち上げて鋭い眼光で神威を見る

「タチの悪い兄妹喧嘩だなあ、このすつとこどっこい。叔父さんも手伝ってやるからさつさと帰るぞ」

傘を担いでそちらに向かう。

くとある日の阿伏兔と神楽

神楽は春雨で生活してから数年が経過し、だいぶ慣れていた。

人を殺すのも、侵略戦争も

(…マミーが知ったら怒るかもしれないアルな…)

自室のベッドの上でくつろいでいると…

(……ん？誰アルか？)

ドアを開けてひよっこりと覗くと、そこにいたのは血まみれの阿伏兔だった。

「…なかなかグロッキーな状態アルな」

神楽は阿伏兔の目を見てため息をつく

「珍しいアルな、お前が同族殺ってくるなんて、なんかあつたアルか」

「…ん、まあな、悪いな」

阿伏兔はギラついている目をガシガシとかいていた。

「ぎゅつてするアルか」

手を出すと「悪かったからそれはやめてくれ」と言つて風呂に入るために歩いて行く

背中を見送る

「……度胸ないアルな」

そう言つて部屋に引つ込む



ザアアアと風呂場でシャワーで血を流しながら先ほどのことを思い出してため息をつく

春雨第七師団に所属していない夜兔達が神楽を襲うだのなんだの発言しており、そこから辺までならいつも通り拳骨あるいは無視でなんとかなったのだが、神楽の人格否定やらその家族の否定の話になった時にもうダメだった、

ブチつと来て、気づいたら目の前血の海だった。

団員達が青白い顔しながら必死で止めているのを見て少しだけ情けなくなり、気づいたら神楽の部屋の前に足を運んでいた。

(…いい歳したおっさんが、あんな我を忘れるなんて情けねえ…)

そして自ら仕事を増やしてしまったことに頭を抱える。

体を拭いていると…

「おーい、阿伏兔く髪乾かせヨ」

下着しか身につけていない神楽ちゃんが現れる

「ギャアアアアア!! 服着ろ!!」

「何、生娘みたいな反応してるアルか、身内だから良いアルよ」

「身内でもやるな! このすつとこどつこい!」

「叔父と姪だから良いネ」

「世間一般の叔父と姪はこんなことしません!!」

ツッコミをしながらズボンで大慌てで履き、神楽にバスタオルを投げる

数分して落ち着き、結局、神楽の髪を乾かすことにした阿伏兔は先ほどまで悩んでいたことを忘れて神楽の恥ずかしきの無きにため息をつく

「阿伏兔つてキレると怖いアルけど、カッコいいアルな」

「え?何?褒められてんのか貶されてんのか分かんないんだけど」

「褒めてるアル。私のナイトみたいで良いアル」

「…これ、あのハゲに聞かれたら殺される問題なんだけど」

「阿伏兔、ハゲに殺されるほど弱くないから大丈夫ヨ」

「いやいや、どうだか分かんないよ」

そう答えると神楽はもたれかかってきて

「ロクに帰ってこないパピーより、阿伏兔の方がお父さんアル」

「……………」

→嬉しいやら虚しいやら感情ごちゃ混ぜ

「じゃ、早く飯食べて寝るアル」

そう言つて立ち上がる神楽の背を見て頭をかく

## 第11話 『地球での戦い』

―阿伏兔―

それから春雨含めて鬼兵隊、快援隊、万事屋一行は地球に戻るために動いていたのだが…

『おいおい、奴さん達出待ちしてるみたいだぜ』

銀時達が乗る船から無線が入る

地球の周りには各星の戦艦があり、地球に攻撃を仕掛けまいとしていた。

「副団長!!砲撃してきました!!」

「避ける避ける!」

『どうする!!このまま全軍で着くのは不可能に近いぞ!』

桂の言葉に坂本は悩んでいると…

『突入するのは二つの艦隊のみにすれば良からう』

宇宙海賊春雨の第三師団団長にして三凶星の一角・范堺はんかいが画面に現れて言う。

『残りの艦隊はその艦隊を守るための殿にすれば良い』

『しかしだな!選ぶ時間などないぞ!』

『選ぶ必要などない。既に決めてある』

徳川喜喜が現れて話し始める。

『この中でも最大戦力である春雨第七師団と鬼兵隊に決まっている。万事屋・坂田銀時、志村新八、神楽は春雨第七師団に乗船させて先に降りろ』

『でも……!』

「だけど、最大戦力とやらを先に下ろして持ち堪えられるの?」

神威の言葉に徳川喜喜は何の迷いもなく『持ち堪える』と答える。

『じゃあ行くぞ!!突撃準備じゃ!!鬼兵隊に第七師団良いか!!』

坂本の大声に范堺が「やかましい」と返す。

第七師団と鬼兵隊の艦隊は一気にアクセルを全開にさせて地球に突入する。

大気圏に突入し、勢いよく地面に向かう。

「も、目標ズレましたああ!!」

部下の叫び声に「早く着陸出来そうなところ探せ!」と指示を飛ばさず

「うわっ!!」

「ちよっ!?!すっごい揺れなんだけど?!ゴファッ!!」

「わー」

銀時の頬にわざと神威が飛んで直撃する。

着陸すると、地球の世紀末つぷりに新八達が「何が…」と話していると…

「遅えしやねえか、万事屋」

「土方さん！近藤さん！」

やってきたのは真選組と吉原の百華達だった。

「どうなったんだ。地球は」

「見ての通りの状態だ。地球で天導衆が大暴れしてるんだよ、それに同調してか天人達が各星から来て暴れてるんだ」

各星のアルタナが虚によって暴走してしまい、それに怒った彼らは天導衆を許すつもりのない天人達はこぞって地球に襲来した。

土方は後方にいる第七師団一行を見て少し、何かを考えていたが言うことなく『着いてこい』と言って案内してくる。

（原作と流れが少し違うから怖かったけど、あんまり変わらなくて安心安心）

真選組と共闘して天人達をバツサバツサ倒して行く

「阿伏兎〜！はい！」

「人をボールにして遊ぶんじゃありません!!」

同族を率いてやってきた孫老師をボールのようにして遊ぶ神威

そこは神楽とやると思ったのだが、何を思ったのか神威は阿伏兎と孫老師を蹴り合いました。

パスがこつちにきたから反射で蹴ってしまおう

「あははく阿伏兎く！昨日、あのハゲ親父と一緒に酒飲んだって聞いたぞー？」

「んげ!?誰から聞いたんだよ」

「云業から聞いたよー！俺の酒は飲めなくて、あのハゲ親父の酒は飲めるってかあー？」

「ぐっふー！」

孫老師が変な声を上げる。

「お前さんに酒は100年早い!!」

酒飲んで戦艦がボコボコになったのを思い出す。

二人で金●をボカボカ蹴っていると、孫老師がエゲツない格好になってこつちに向かってくる

（深読みしてアレで自分の体を覆ったんだっけ…？今思えばどんな深読みしたらあんなるんだ…）

軽く蹴って地面に落下する孫老師を見る

（…汚ねえ…）

「じゃあ、阿伏兔ー！この戦いが終わったら俺と一緒に酒飲もう！」  
「死亡フラグを立てるんじゃない!!」

二人揃って孫老師の頭部を踏みつける

物凄い勢いで地面に落下した孫老師を見て孫老師の仲間達が『老師！が死んだ!』と  
叫ぶ

「いやいや、お前さんらどこ見て判断した?」

「大丈夫、皺だらけの爺さんが爺さんらしく萎れただけさ」

「…その言い方やめてくんない?」

それから孫老師の部下達を蹴散らすと神威が『ふう、準備運動になった』と言って歩き始める。

ここに虚が現れなかったということは、銀時達の方に向かっただろう。

「……本当にアンタと酒飲みたいと思ってたんだよ、俺だって」

「…あ?」

神威はふてくされながら歩くのを見てピシッと固まる。

「何々?先に親父さんに越されたのが嫌だったのか?くく可愛いな、お前さんも」

「つゝ!茶化すなよ!」

神威の拳がブンツ!と顔をかすめるがヒョイツと避けて笑う

（なんだなんだ可愛いところまだあるじゃねえか、親子喧嘩、兄妹喧嘩して大人っぽくなったから少しぼつかし寂しかったが、まだまだ子供だな）

二人が歩いて行く後ろに江華が現れる

「……？」

阿伏兎は立ち止まり後ろを見る

「阿伏兎？」

「ん、ああ……なんでもねえ」

神威には見えていないのか、江華に反応しない。

江華は少し悲しげな表情を浮かべていた。

『気をつけて』

そう言われて少し疑問にも思ったが、振り返らずに進む

阿伏兎達は万事屋一行と合流すると虚が不敵な笑みを浮かべて立っていた。

（……たーく、嫌になるな……こう何度も戦うの、は……）

地球のアルタナがあちこちから爆発した瞬間、体内のアルタナが一気に減ったのが分かる

（……あれ、これもしかして……）

『徨安の不死者は他の星のアルタナじゃ生きられない』



その言葉を思い出し思わず笑ってしまう。

(あー……今更思い出すとか最悪だ。まあ、仕方ない、ここは乗り越えないとな……！)

神威達が虚達に攻撃したのを見て回りの雑魚達を片付けるために動き出す。

雑魚を始末して虚の方向に向かうと、真選組をバサバサと斬っていき、震える新八の元にゆつくりと虚がやってきていた。

「……………」

震える新八を見て、助けなくても新八は動けるだろうと思ったのだが、そうは思っても助けないといけないと思い、足が動く

く逆転兄妹。パロく

春雨第七師団に入った神楽は吉原での仕事を終え、艦隊に戻ってきていた。

「俺が言うのもアレだが、家族と仲直りしたいならいくらでも手助けするが」

「……………要らないアル」

神楽は窓の外を見ながら呟く

阿伏兔は書類をまとめながら神楽と話していた。

「…マミーが死ぬとき、そばにいなかった馬鹿兄貴も、マミーが死んでから全然帰ってきてくれなくなつた。パピーも要らないアル。今更謝つても遅いネ」

「……………」

（…なかなかひどい反抗期だなあ、こりや…）

阿伏兔はペンを置き、神楽を見る。

吉原で神威と遭遇し、殺し合いの喧嘩をしてから神楽はずつと浮かない顔をしていった。

それに、何回か星海坊主が第七師団に会いに来ようとしているのも知っている。

「それじゃ、当分許すつもりなんてないって事でいいのか」

「そうアル」

そう言ってくるりところちらを向く

「それに、阿伏兔と、この第七師団で海賊らしく旅するのも悪くないアル。楽しいネ」

「…あ、そう」

神楽が春雨第七師団にきてから団員達がやけに明るくなっていた。

まあ、野郎の中の唯一の女性でなおかつ、腕つぶしもたつ。

褒める時はとことん褒める神楽の性格に団員達は『姉御!』とか『姐さん』とかふざ

けた名称で呼んでいる（明らかに団員達の方が歳上なのに）

「なんか、最近目を合わせないアルな、阿伏兔」

机の近くにやってくる神楽に「そんな事ありませんよ、団長が目を合わせないだけです」と返す

「マミーと似てるアルか？」

「何を唐突に……」

神楽を見上げると、まだ幼いにも関わらずぐんぐん成長している神楽の体を見てプイツと顔をそらす。

「江華の方が大人の美貌って感じだったな」

「……それどういう意味アルか、まだ子供って言いたいアルか」

「俺にしてみればいつまでもガキだよ」

「なら、こつち見ろヨ」

「それで、団長さんよ、明日から地球でまた任務があるんだが行くか？」

「……流れるように話題そらしたアルな」

（……仕方ないだろ、姪だつて言つても元ヒロインの成長している過程なんてあんまり見たくないんだよ！俺だつて立派な男だし！！）

「どこで任務アルか？」

「吉原での任務だな、最近、吉原で暴れてる他の師団の団員がいるみたいだな軽くとつちめるって話だ」

「まためんどくさいところに行つたアルな」

翌日、神楽は阿伏兔と二人で地球に降り立つた。

隣を歩く阿伏兔は書類を見ながら真面目に話していた。

(…相変わらず真面目な奴アル)

神楽は阿伏兔の言葉を聞きながら歩いていると…

「……」

吉原に着き、ある程度見回っていると…

「いたアルな、あれが馬鹿師団の団員ネ」

「あ、ホントだ。片腕フックのところの団員だ」

「このまま締めて来た方が良いアルか？それとも殺して来ていいアルか？」

「んまあ、記憶飛ばすぐらいの勢いで殴って連れ帰るか」

「じゃあ行つて来るネ、阿伏兔は適当に周り見てるヨロシ」

「へーい」

神楽は阿伏兔を残してその団員達の元に行き

「おい」

そう声をかけて殴りかかる

「き、貴様は!!」

「人の管轄下で何好き勝手してるアルか、だから嫌なんだヨ節操のないやつ」

そう言つて思いつき蹴り飛ばすと、首と胴が離れる

「あ、思いつき蹴りすぎたネ」

『なあにしてんの、団長』

無線で阿伏兔が言つて来る

「弱いのが悪いアル」

「貴様あ!!」

残りの団員がこつちに向かつて来たので、神楽はやる気なさげに無線に向かつて『やっぱり半殺し無理だから全員殺すアル』と言つて四人まとめて吹き飛ばす。

『おいおい、血天井になつてんじやねえか?今の音的に、後始末めんどくせえ、このすつと(ぐ)つと(ぐ)』

「帰つたら一緒に始末書書くアル」

神楽は天井に突き刺さった団員から返り血を浴びてしまい、ため息をつく

振り返り歩き始めると、そこには騒ぎを聞きつけたのか、百華と日輪がいた。

「騒ぎ起こして悪かったアルな、弁償代ネ」

そう言つて札束の入った袋を月詠に投げ渡す。

日輪とすれ違いざまに

「貴女みたいなお嬢さんが海賊にいるなんて珍しいわね、神威くんに会つて行かないの？」

神楽は足を止める

「馬鹿兄貴に会う必要なんてないアル。赤の他人が踏み込んでくるんじゃないアル」

神楽がそう言つて歩いて去つて行くのを日輪は悲しげに見つめていた。

# 逆転兄妹パロ【1話完結…?】 番外編『逆転兄妹篇』

―神楽―

母が、ママーが死んでから数日間はパピーがいてくれた。

数日経ち、パピーは家を空ける事が多くなった。

数日帰らないときはまだマシな方だ、家にある物でなんとか凌げるし、パピーはそれなりに食事を用意してくれているから助かるが、数ヶ月間いないときは死ぬような思いだった。

烙陽は治安が悪い、夜兎である事を理由に暴力を振るって来る大人なんてたくさんいた。

それこそ、連れ去ろうとかそういう奴もたくさんいた。

そんな治安の悪い星で暮らしていた神楽の心の中はどんどん暗いものになって行つた。

一人で家出しようと荷物をまとめたとき、大きな船が止まっているのが見え、そちらに向かう

(…叔父さんアル)

神楽は自然と足がそちらに向かって進んでいた。

「始末書終わったアルな…」

「どつかの誰かさんが他の師団の団員殺してくれちゃったから余計に増えたからなあ」

「まだ根に持つてるアルか？根に持つ男は嫌われるヨ」

「根に持つて結構。ところで団長さんよ、こんな町をフラフラ歩いてて大丈夫なのかよ、ロクな目に合わなさそうだけど」

吉原での仕事を終え、阿伏兔と二人で歌舞伎町を散策していた。

「別にいいアル。部下たちが自由にしてるからこつちも自由にするネ」

「いや、ほとんど俺の金だからね？そこんとこ忘れないでね」

町を歩いていると…

「……………」

「ん？どうした？」

神楽が公園を眺めていた。



(…ああ、あの公園で神楽はいろいろあったんだよな、原作だったら…)

春雨を選んでしまった以上、それは出来なくなってしまった。

神楽のいた居場所には神威がいる。

とてつもない罪悪感に襲われるが、神楽は何か納得したのか阿伏兔の横に歩いてくる。

「何辛気臭い顔してるネ、公園で遊びたいアルか？」

「そんなわきやないだろうが」

いろいろ話しながら船に戻って歩き出す。

「阿伏兔く帰ったらご飯作ってヨ」

「え？俺まだ仕事あんだけど」

「その前にアル」

「おいおい、パワハラだぜ？」

「阿伏兔の作る料理美味しいアル」

「しゃあねえな」

「(…ちよろいアル)」

艦隊に向かって歩き出す神楽と阿伏兔だった。

地球で仕事するのは当然と荒事に巻き込まれるわけで、阿伏兔が神楽が吉原近くで大暴れしていると部下から報告されて見に来てみると、真選組の沖田総悟くんと派手にドンパチしていた。

「春雨第七師団の団長様が何の用ですかねイ!!」

「仕事アルよ!」

(…仲良さげだなあ…)

夜20:30になってもなかなか帰って来ない神楽を心配して艦隊から降りて歩いていたら見つけたのだ。

このまま地球にいるのも悪くないのではないかと阿伏兔は感じていた。

本当だったら神楽は万事屋にいて、あの二人と馬鹿騒ぎしてたはずなのだ。

それを自分は横から掻っ攫ってしまった。

罪悪感は今も払拭できないが、同時に少しだけ期待している部分もあった。

何に、とは言わないが

『副団長!1時間後には出発します!』

「おう、団長さつさと回収して来るわ」

そう言つて無線を切り、ゆつくりと神楽の方に歩み出す。

気配を消してのんびりと歩いていてから、神楽達の周りを囲んでいた真選組隊士達に軽い拳骨をかます。

六人ぐらいまとめて気絶させると、阿伏兔が来たことに気づいた神楽が『うげっ…』と言つているのが聞こえる。

「神楽。仕事に熱心なのは結構、だけど、こんな時間まで仕事を頼んだ記憶は無いけどなあ?」

「……(汗)」

神楽が引いている。

原作の神楽がたまに見せる引き顔に似てて笑える。

「半端者が夜遊びなんて100年早い」

拳骨をお見舞いすると地面にめり込む神楽

「喧嘩両成敗。ほれ、さっさと帰るぞ団長」

そう言つて地面から引っこ抜いてその場から立ち去る。

鬼兵隊と共闘関係を結ぶようになってから、神楽は来島また子に構うことが増えた。

なんというか、女の子同士（多少物騒）戯れてるのを見るとなんか癒される。

「また子、他の奴らに銃は向けんなよ」

神威が居ないせいなのかなんなのか、高杉くんの話のターゲットがこつちに向いている気がする。

まあ、計画等々の打ち合わせは阿伏兔が担当しているから仕方ないのだが

「――」

「――」

二人で会話していて感じたのは高杉くんが思いのほか話してくれるということ。

原作でもあんまり出て来なかったから、あんまりイメージが湧かなかったけど。

地球に向かうことになり、その打ち合わせをし終わると神楽を回収して艦隊に戻る。

「阿伏兔、地球に行ったら馬鹿兄貴の相手するネ、阿伏兔は雑魚狩りヨロシクネ」

「了解」

「…で、今日の晩ご飯何アルか？」

「ん？地球で手に入れた米使ってチャーハンでもなんでも作ろうと思ってるぞ」

「チャーハンアルか！他は？」

「カレーとかその他諸々、あれ…？俺、主夫みたいになってない？」

「主夫アル」

「あれ？否定してくれないの？そこ、俺一応副団長だよ？」

洛陽に行くまでは本当に早かった。

え？展開が早すぎるって？そこらへんは察してくれると助かる。

だって、話すほどの代わり映えのあるようなものじゃなかったし

基本的に原作と変わらない展開だったし

「母さんに置いていかれて、泣いているだけの弱虫の馬鹿兄貴なんて要らないアル」

激しく戦う神威と神楽

「神楽……」

星海坊主は神楽の言葉に息を呑む

「…私は、最後まで守ろうとしたアル…それなのに、手放しちやっただのはお前らネ！何を

今更っ！」

(…多感な時期に江華が死ねばそうなるよなア…)

何回か神威と星海坊主は愛情表現やら感情表現が不得意な男だと問い聞かせていた

のだが、神楽は二人を許すつもりがないのか受け流されて終わりだった。

それならば喧嘩しかない、思いつきりぶつかって仲直りしてくれたら幸いだと感じた。

神楽の本気の拳を、神威や星海坊主に分かせてやれと背中を押した。

どっちにしろ、神楽は二人を殺せない。

「やめてくれえええ!!」

星海坊主が走って二人を止めに行こうとする。

「!」

殺気を感じ、崖の上を見ると、そこにいたのは笑っている虚がいた。

星海坊主は気づいていない。

声を上げて星海坊主に知らせるのも良かったが、明らかに虚が神楽を狙っているのを

見て神楽の方に走る。

神楽を押し飛ばし、虚の刀が阿伏兔の肩に直撃する。

(…腕取れた…)

その後、すぐに降って来た爆弾に神楽と神威が吹っ飛ばされる。

星海坊主、阿伏兔 v s 虚の戦いは互角に見えて明らかに虚が優勢だった。

虚の腕がもがれても、心臓を斬られても虚は笑っていた。

(…同じ不死者の自分でさえ、あれは薄気味悪いなあ…全く)

「おい、義弟。不死者を殺す方法あるか」

星海坊主の声かけに阿伏兔は煙を上げながら立ち上がる

「んなもん、アルタナ切れるまで戦って、アルタナが切れたらもう一回殺すのが良いんだよ」

「それが出来ると思いで？」

虚の余裕そうな言葉に

「アンタ死にたいんだか生きたいんだか、ハッキリしてくんない？ハッキリしてくれたらちやんと答えてあげるからさア」

「不死者を殺す方法を知っていると？実に興味深い。やはり、同じ不死者は違いますね」

「質問に答えてくれない？俺、壁に喋ってんの？」

阿伏兔の軽口に星海坊主が何か心配そうにこちらを見ていた。

虚の瞬間移動に気づき、阿伏兔は星海坊主の背後に向けて番傘を放つ。

虚はそのまま番傘を蹴り飛ばし、吹き飛ばし攻撃をかけてくる。

「！阿伏兔！！」

吹っ飛ばされて崖に直撃した阿伏兔を心配する星海坊主。

しかし、すぐに降って来た虚の攻撃に必死に対応していた。

(…アルタナ…やべ、切れて来た…)

後一回保つか分らない再生能力。

星海坊主が懐からアルタナの結晶石を出す仕草をする。

「心臓を握りつぶすのとどっちが早いと思う?」

「私が両断するのとどっちが早いと思いで?」

「さあな、だが!嫁へのプレゼントは一ヶ月前に買い揃えておくタイプだったぜ!!」

虚の心臓をアルタナの結晶石ごと握りつぶす。

「っ……!」

阿伏兔は立ち上がり、千切れた腕の方に向けて走り出す。

しかし、虚が再生するのが早く、虚が星海坊主に斬りかかろうとしていた。

(間に合えっ……!)

星海坊主の真後ろに現れた虚に向けて番傘を勢いよく振るう。

それに気づいた虚が番傘を受け流しながら、星海坊主から刀を引き抜き、阿伏兔に斬

りつけてくる。

それに向けて阿伏兔も撃つ。



虚の心臓めがけて撃ったが、わずかに軌道がズレる。

「ぐっう……」

虚が刀を横薙ぎに払う。

思いつきり肺を切られて痛い。

番傘を地面に突き刺し、なんとか倒れないようにする。

阿伏兔と虚、それぞれ煙を放っているが、虚は余裕そうなのに対し、阿伏兔は全く余裕がなかった。

「貴方がたのおかげで久しぶりに生を、生きているという実感を得られました。しかし、アルタナが底を突いてしまったようだ」

虚が落ちて来た天導衆の船を見て、あのカラスみたいなマスクをし「ここで引かせて貰います。アルタナが底をついたのは貴方も変わらないでしょう」と言つて歩き去っていく。

「阿伏兔、おい」

星海坊主の言葉と同時に天導衆の船から錫杖を持った、包帯だらけの男達が降りてくる。

「……おいおい、奴さん達、そう簡単に引かせてくれないらしいぜ……たくっ……こっちはアルタナが底を突いてんのによ……」

ゲホツと血を吐くと星海坊主がハツとなり、血だらけのまま起き上がり、阿伏兔に「とりあえず避難するぞ」と声をかけながら担ぐために来ようとする……

「星海坊主さん!!」

定春に乗った新八達がこつちに向かつて来るのが見える

「!」

遠くの方に神楽達も見えて来る

「とりあえず逃げるアルよ!」

神楽がそう言つて阿伏兔の腕を肩に回して立ち上がる

「……おいおい、怪我してんだろ」

神楽にそう言つと「黙つて担がれてるヨロシ」と言つて引つ張つて来る。

とりあえず全員で合流して逃げようとした時、天導衆の船から包帯だらけの筋肉質の奴ら（青い顔のリーゼントの男と緑色の顔をしたハゲ）が飛んでくる。

「!!」

神楽を突き飛ばし、錫杖を番傘で防ぐともう一人が銀時達の方に飛んでいく。

血だらけの銀時が定春の上で木刀を振るい、男を押し飛ばす。

「つ……!」

「銀さん!!」

男の圧力に押し飛ばされ、定春の上から落ちる。

「阿伏兔っ！」

神楽達の方に包帯奈落が向かって行き、遮られてしまう。

必然と銀時と隣り合わせで戦うようになって、銀時は包帯だらけの男を見て呆れたように「おいおい」と言う。

「…何？コイツら、再生したんだけど…」

「…虚の傀儡になってんだろう。不完全に再生してるあたり、不死になりたくて虚の言葉に乗せられて輸血でもしたんだろ」

（…コイツら、最終回で出てくる奴らじゃねえか…？え？…ここが出てくんのか…）

そして船の方を見ると巨大なアルタナが積んであるのが見えた。

（…アレ、地球産のアルタナだな…あれ斬れば、コイツら消えるだろうな…）

完璧な不死者でないアイツらを倒すには、あのアルタナが必要だ。

「銀さん!!」

「阿伏兔っー!!」

二人の男はほかの包帯奈落と違って耐久値が馬鹿みたいにあり、いくら殴っても全然倒れなかった。

「おい、坂田銀時！あれを斬ってこい！アレなら倒せる」

そう指示出すと察してくれたのか、銀時がそっちに走っていく。

銀時に付いていた緑色の顔色の奴を掴み、阿伏兔の方にいた青色の顔色の男の首を腕で全力で掴む。

夜兔の全力の力はさすがに外せないのか、かなり大暴れしていた。

「どつちが先に消えるか勝負と行こうじゃねえか」

その言葉に反応した星海坊主が「やめろ！阿伏兔!!」と大声を出す。

銀時が斬ったことにより、ドンツ!!と爆発が起こり、アルタナが放出される。

捕まえていた男達が暴れて逃げようとしていたが、為すすべなく掻き消えて行く。

(ああ……こう言う終わりも良いかな……)

左腕が消えて行く。

地球産のアルタナを阿伏兔は受け付けないと知っていた星海坊主は今にも走ろうとしてくる。

その前に神威に押し飛ばされ、アルタナの光から隠すように定春が隠してくる

「阿伏兔!!」

神楽が走り寄ってくる

(……美人だなあ……江華にそっくりだ……)

何か言っているのは分かるが、声が聞こえなくなっていく。

だんだん神樂が泣いているのが見える。

(…なんか、感動…)

『部下でもいい、甥や姪に囲まれてでもいい、幸せに最期を迎えるんだよ』

江華の言葉が脳裏によぎる。

泣いている神樂の頭を撫でる。

その神樂の横に江華がいるのが見えた。

『阿伏兔』

そう言っ手て手を差し出してくる。

その手を取る。

終わり

最終回後く俺たちの旅はここからだ!!く

第12話 『最終回の結末は皆さんの想像次第というというのが一番困る』

ー新八一

新八が歯を食いしばり、虚に向かって突撃する。

しかし、虚はそれを物ともせず避けて首を斬ろうとする。

「!」

終わった、そう思った矢先、目の前に番傘が飛んでくる。

虚はそれを避けて飛び退く

「!阿伏兔さん!」

横を勢いよく通り過ぎた阿伏兔はそのまま虚に殴りかかる。

煙を出しながら戦う阿伏兔。

「撃てえ!!」

夜兔の音が響き渡り、虚に向かって砲撃する。

新八は覚悟を決めて木刀を握りしめ走る。

星海坊主と二人で協力して虚を取り押さえ、神楽と神威が殴りかかる。

全員でボコボコに殴っていたら、虚が満身創痕になったのかアルタナの穴に背を向けて不敵に笑う。

銀さんに何か言っていたが、距離の問題から何も聞こえなかった。

空から落ちて来た戦艦は桂達一行の力により、なんとか軌道を外れて銀時達は無事だった。

(…まあ、ここからは彼らが何とかするだろうし、赤の他人である俺が出しゃばる必要なんてないだろうな)

ここからは彼ら松陽の弟子達がすることだろう。

神威達と共に艦隊に戻り、準備をしていると、なかなか出航の準備が整わないのか、長期間、地球で待たされていた。

その間にもある程度復興が進んだ地球を眺めていると、艦隊近くに銀さんがやってきたのが見えた。

「で、何の用だ侍さんがよ、残念ながら団長はオタクの従業員のところに遊びに行った

ぜ」

神威に会いにきたわけでもなからうが、そう茶化すと『あの馬鹿息子に会いたくねえよ』と返させる。

そう言つて懐から出したのは不死者の心臓だった。

言わずもがな虚の心臓なのは理解した。

「そんな厄介なもん持つてどうした？何？俺に壊して欲しいのか？」

「そんなわけねえだろ、不死者のアンタからしてみてもこれを破壊したらどうなるかわかるか？」

その質問にその心臓を見る。

「不死者がこんな状態なの見たことねえからわからねえなあ。その心臓を本体に戻して蘇るのが虚か松陽とやらか運試しみてえなもんだ」

彼ら松陽の弟子にしてみれば松陽に戻つて来て欲しいのだろう。

「そうか、どうなるかわからねえつてことだな」

そう言つて背を向ける。

「……」

銀時の背中を見て高杉を思い出す。

「そーいやあ、高杉晋助は元気か？まさか兄弟子の血をもらつて生還したとかないよな



？」

そう軽口を叩きながら言うと、銀さんが少し驚いたような感じだったが、軽く手を振って去って行く。

それを見て（…ああ、そう）となる。

### ―星芒教団―

最近地球に不死に魅了された教団が出来たと聞き、神威と共に地球に降り立ち、星芒教を蹴散らしながら緑色の光を放つターミナルを遠目から眺めていた。

周囲に人はおらず、遠くの方で神威と星海坊主が戦っていた。

「……」

こうしてみると、本当に最終回なんだなあ〜としみじみ思っていた。

真後ろに教団の兵士が襲ってくるのを番傘で撃ち殺す

主人公達が集い、虚は自らの生に終止符を打った。

（…不死者の終わりか…俺も正直何も考えてないな…）

もう、年齢を誤魔化すのは無理になって来た気がしたのでそろそろ後任を考えなければならぬ。

(普通に考えて50年以上生きてたら怪しまれるわな)

今まで虚のようにならなかったのは戦闘民族であるが故に自分より長く勤めていた人間が死んだり、春雨の上層部が蹴落としかけたおかげでバレなかったのだろう。

「…そろそろあの馬鹿団長に仕事押し付けて隠居するか」

どれくらい生きて、いつ死ぬかなんて今は考えていない。

虚のように精神分裂するかもしれないが、そうなったらどうするかも考えなければいけない。

「…不死者つてのも、いろいろ考えもんだな」

爆発する音も静かになり、神威達の足音が聞こえて来たので立ち上がる。

それから数ヶ月、地球では普通の、ありきたりな終わり方(?)を迎え、物語は完全にオ리지ナルルートに入ったわけだが…

「……………」

「うわあ、シンスケ小さくなってるねえ」

神威が地球のご飯を食べたいと言ったので仕方なく着いて来たら、鬼兵隊の人間から、とうか主にまた子から『アルタナの穴から生まれた子供について聞きたい』と言われてしまった。

不死者だとしても、別の星の不死者なんてわかんねえよ、と言ったのだが、良いから来てほしいと言われて仕方なく田舎町のとある一軒家に着く

神威は『シンスケ』と言って遊んでいる傍ら、やたらぶつきらぼうなのてまた子が必死に神威から離らかさそうとしていたりと愉快な中、自分の対面には武市がいた。

「相変わらず表情筋の死んだガキだな」

そう呟くと武市がお茶を飲みながら

「それがまた子さんに希望を持たせているのです。成長速度もかつての虚を彷彿とさせます。故に我々は彼が晋助殿の生まれ変わりだと思っっているのです。しかし、確定してないからこそ同じ存在である貴方に頼った次第です」

真面目なトーンで言われれば茶化すわけにも行かない。

そもそも、この結末は『読者の想像次第』という雑な返しで終わったはずだ。

だからこそ、めんどくさいこの上ないのだ。

「それで？なんて答えてほしいんだお前は、俺として見れば高杉の外見をした別人になるかもしれないし、高杉としての記憶を取り戻すかもしれないねえ、そんなのは成人して

から決める事だ。まあ、ひとまず言える事は不死者に似た何かだろうな」

「そうですか」

意外とあっさりした返しに拍子抜けだが、まあ、この展開は別に間違っていない。

不死者なんてモノは何度死んでも何度も生きているのと同じモノだ。

「それに、星芒教が壊滅したとはいえ、不死に魅力を感じてまた奪いに来る奴らがいるかもしれないねえ、そうならねえ内に地球から移住する事をお勧めするが、逃亡については手伝つてやろうか？」

「ここから離れないとわかっている上で聞く」と

「…それについては後々考えるところでしょう。それよりも貴方が今後どうするかという方が気になりますかねえ」

武市の言葉に笑い

「もう既に隠居は考えてるよ」

「ほう、元の星に戻るのですか？」

「さあな、あの馬鹿団長もやつと真面目に仕事をこなすようになったんだ、それに、そろそろ歳を誤魔化すのも無理になって来たんでな」

「そう言つて立ち上がる阿伏兔に武市が見送ろうとすると

「見送りは結構だ、勝手に帰らせてもらおうからな」

武市が瞬きをした瞬間、目の前から消えた阿伏兔に「なるほど…」と小さく納得する  
武市

「阿伏兔く？帰るよく？あれ？阿伏兔は？」

神威を見てため息をつき、武市は心の中で『せめてこの人を納得させてから姿を消して貰いたかった』と思いつつ、この家を破壊されるのを覚悟の下、神威に事情を話す為に咳払いをする。

# 第13話 『お年玉というのは不死者にとっては害でしかない』

―地球―

全てが終わった後、神威が定期的に地球の飯を食べに行きたいと言っていたので仕方なく付いて行く事が増えた。

まあ、その過程で妹と喧嘩するのが日常となり、平和な日々になった。

「…どこが？どこが平和なのよ」

「俺等に見れば平和だぜ」

隣に座っている銀さんがアイスを食べながら呟く

目の前でドツカンドツカン戦っている二人に途中参加した沖田くん

「…完全にクレーター出来るぐらいなんですけど、止めてくれない？伯父さん」

「誰がおじさんだ、殴り飛ばすぞ」

普通に絡んでくる銀さんに適当に返す

「というか、オタクら、何フツーに地球来てんの、宇宙海賊としての責務を全うしろよ」

「それ団長に言ってくんない？」

「未成年に団長やらせたそつちが悪いんでしょうが」

「返す言葉が微塵もねえ…」

「番傘を持ち変えると…」

「つうかさ、あつちは良いとしてこのメンツなんなの？ シリアス展開に行きたいのかギャグに行きたいのかハッキリしてくんない？」

「あのメガネくん呼ぶか〜おーい」

「そう呼ぶと新八が『人をギャグ要員扱いしないでくれませんか？』と言って歩いて来る。シリアス展開的には『高杉くんの安否について』とか話す？」

「やめてくんない？ その絶妙にヤバい案件。つうか、銀八先生の方でネタにしただろうが」

「俺いなかっただからしーらない」

「お前、別校設定だしなあ〜転校すれば？ 虚いるんだから同じ不死者枠で」

「アレと一緒にしないでくんない？ おじさんそんな人格分裂してないから」

「（…自分でおじさん呼びしてるし…）」

「…アンタらさつきから何の話してんですか…」

「あ、安定のツツコミ兼ネタ枠きた」

「え？ 話す内容がないから呼んだとかそんな感じですか？ もしかして」





新八↓中身神威

沖田↓神楽

「すつつつこい誰得？真面目な団長とか」

隣にいる神威の見た目をした中身新八くんに言うのと、新八が『というか誰得なんですか？この入れ替わり』と死んだ目で言ってくる。

中身神威の新八と中身銀時の神楽がすつつこい喧嘩してるのを遠くから眺めていた。

「…あの入れ替わりだと普通に神威さん負けますよね…」

「そりゃー夜兎と人間だからな、超サイヤ人にクリリンが挑むようなもんだからな」

「…阿伏兎さんって時々辛辣になりますよね」

「え？何が」

「というか…この入れ替わりいつ終わるんですか？二話連続続くんですか？」

「…続かねえだろ」

そう言つて喧嘩する新八のガワの神威と横にいる神威のガワの新八の首根っこを掴み、二人を勢いよくぶつける。

「何してんのおお!!？」

神楽のガワの見た目の銀さんがツツコミを入れて来る。

声はまんま神楽なので不可思議な感覚になる。

「いや、頭もう一回ぶつけたら治ると思ってな」

「いやいや!!ありえない音したけど!!?戻る前に二人の記憶消えるわ!」

「高所から落ちねえ限り記憶は無くさねえよ」

「その不死者にしか実践できない事しないでくんない!!?」

しばらくすると神威が元に戻ったのか頭痛いと言っていた。

「ほれ」

「…え?何?オチつけんのがめんどくせえからそんな戻し方?ところでぱつつあんは

…」

そう言って新八の方を見るとメガネが跳ねてた

「すっげえ戻り方した」

そう呟くとどう喋ってんのかメガネ新八が「何してくれちゃってんの!!?」と叫んでいた。

「明日には戻ってるから安心しろ、ほれ団長帰るぞ」

ズルズル引き摺っていく阿伏兎

お年玉というものは貰う人間はかなり嬉しいものだが、あげる側は身を割く思いだと  
言うのを嫌というほど理解した。

「何でお前ら、こういう時だけ俺を年長者扱いしてくんの？つうか、夜兔にお年玉なんて  
いう文化ねえだろ、神様とか縁遠いもんだろ」

「地球の良い文化だけを取り入れてみたんだよ」

「…良い思いすんのお前らだけだからね？」

財布の中の札が消えて行く感覚が久々過ぎて泣きたくなる。

爆食いする神威のそばででっかいたため息をつく

「阿伏兔ー！！」

神楽が手をブンブン振って来る。

「……逃げるわ」

「逃げるなひきよーものー」

ガシツとズボンを引っ掴まれる。

「お年玉ちよーだいアル!!」

「……カゾクジャナイヨ」

「何でカタコト？」

「阿伏兔は叔父アル！」

満面の笑みで言われれば仕方なく渡してしまう

「…お前ってホント姪っ子には甘いよな…」

「うるせえ…」

そう言う阿伏兔と神樂の後ろにいた星海坊主が「俺にもくれ」と言ってくる。

「いやお前は家族じゃねえ」

「義理の兄だろうが!!」

「お年玉文化知ってるか？年下にあげるんであつて歳上にはあげねえ代物だよ、お前義理の兄だろうが」

「お前より年下ですう!!ジジイ!!」

「…アルタナって生身の人間に注いだら腕が溶け落ちるの知ってるか？」

「わあくすつごいキレてる阿伏兔く」

ぎやいのぎやいの騒ぐ星海坊主キレる阿伏兔

「仲良いんだか悪いんだか分からないネ」

「…仲良しなんだろ」

「つうか、俺がジジイなら江華は最も歳上だぞ、それネタにしたらぶち殺されるの確定だな（あの世で）」

冷静な阿伏兔の声にハツとなる星海坊主

「……………」

ダラダラと汗を流す星海坊主

黙って阿伏兔の背後を見ていた。

「??？」

「おーい、神楽ちゃん。お父さんと一緒にバイキング行こう〜！」

「分かったアル!!」

ハイテンションで居なくなる二人に首を傾げる神威たち

「??？」

「阿伏兔」

最終回の後の話は書かないのが定番中の定番なのだが、最悪なことにイレギュラーな存在があったせいも、まだ終わりじゃないらしい。

(…ホント今更だけど、阿伏兔不死者設定とか誰得?そこは神威不死者の方がウケそうだったのにな〜)

そして、何より厄介なのがあの子供がアルタナ杉…高杉ということが判明したらしい。

「めんどくさく絡みたくねえ」

地球は人口密度が多過ぎてそのうち見つかりそうだが、しばらくは隠れて暮らせるだろう。

「…寝るか」

彼らが人生終了するまで見送ろうと思つたが、流星にそこまで勇氣はなかつた。目を閉じた阿伏兔のそばに誰が立っていた。

相棒兼叔父が消えたと神威が荒れていた。

「ほんと、大迷惑野郎だよ、アイツ」

銀時は万事屋でパフェを食べながら呟く

「引退準備してたつていうの云業さんから聞きましたけど、本当にこの地球で行方不明になるなんて…」

「出国したんじゃないの?というか、不死者この星好き過ぎない?やめてくんない?これ以上シリアス展開増やすの」

「誰に言ってるんですか…」

万事屋にいた神楽もなんだかんだ言っ探すのを手伝っていた。

「不死者が死に場所をここにしたらんなら放っておいてやるのが幸せなんじゃねーの？ 適当に掻き回して第二の展開になるの嫌なんですけど、俺絶対加担しないからな」

「…確か前に星海坊主さんが言ってましたよね、別の星のアルタナで生まれた不死者は別の星のアルタナでは生きられないって」

「なら死にてーんじやねえの？ 虚みたいに自爆死されるよりかはマシだし」

「…冷たくないですか？ 銀さん」

そう言う新八に手をヒラヒラさせ

「人様の生き方にとやかく言うつもりねーし、あくまでアイツは共闘した関係でしかねえし」

そう言っ風呂場に向かう

# 第14話『仕事というのは終わりがあるから頑張れるモノ』

ノ』

ー阿伏兔ー

不死つて時間が無限すぎて、時間が超ゆつくりと流れるもんだ。

仕事が全然終わらない苦しみて分かる？時計と睨み合いっこして過ごしてるよう  
なもんだ。

「地球つて狭いなあ〜」

「頼むから、地球で姿消したりしないでくんない？オタクん所の馬鹿団長さんが暴れて  
るんだけど？」

早速銀さんに見つかりました。

(はっやーい☆)

俺がかくれんぼが下手くそなのか、銀さんが隣で団子を食べながら話していた。

「置き手紙残して始末書とか書いて来たんだけど」

『全部引き継ぎしました』

「それで伝わると思ってたお前がスゲエわ」



適当に撒こうかなと思つたのだが、さすがは主人公だけはある普通についてくる。

「頼むから引退させてくれつての、50年以上春雨にいたら大いに怪しまれるわ、つうか現在進行形で不死身説出てたし」

「逆に何で春雨選んだんだよ、バレンのが嫌なら星に籠つてたら良かっただろーが」

「なーんもねえ星にいたがるほど酔狂じゃねえやい」

そう言つて歩いていると、銀時が何か言おうとしているのに気づく

「?なんだ、顔見せろとかそういうんじゃねえのか?」

「…高杉がいなくなつた」

「はい?」

「…正確に言えば高杉の見た目したアルタナの穴から生まれたガキが居なくなつた」

「んなもん、てめーらで探せば良いだろうが、どつかの集団に拉致られてるんじゃねえのか?そこは主人公が文句言いながら助けに行くのが筋つてもんじゃねえのか、このすつとハッパッパ」

銀時は頭をガシガシ搔くと「あー!!」と叫び

「数が数なんだよ!!不死になりたい奴らの中に夜兎の残党がいんだよ!!しかも!数が多いから!やりたくないの!!分かつて!」

怒鳴る銀時に引き気味になる。

「お、おう…」

「第七師団はテメエが抜けたせいで馬鹿息子は話聞かねえで第二の夜王になる勢いだし!!もう原作は最終回に突入したつてのにそっとしておいてほしいのにさあ!!」

怒涛の勢いで話す銀時

その内容にん?となる。

「…第二の夜王つてなに?あの馬鹿団長なんかやらかしてんのか?」

「そうだよ!吉原で大暴れしてんだよ」

「えええ…」

―原作時間軸《丁か半かの後》―

阿呆提督をぶつ殺した神威と高杉達鬼兵隊との同盟になり、地球に攻め入るための準備になったのだが、その前に春雨の他の師団をまとめてから行く事になり、阿伏兔の仕事は今までの5倍以上に膨れ上がった。

「…いやさあ…一応提督なんだから書類見るぐらいのことはしろよ…いや分かってたけどさ、このすつとこどつこい…」

部屋にて大量にある書類やらなんやらと睨めっこしていた阿伏兔は、独り言をこぼす確かに、春雨は書類の提出と言った真面目なサラリーマンの仕事はないとはいえ、ある程度他の師団について知っておかないと意味がないのである。

それに、他の師団団長達は一癖も二癖もある輩ばかりだ。

いくら阿呆提督の指揮が嫌だからという理由であの場を裏切ったとしても、10代そこらの馬鹿提督に無条件に着いて行くほど大人しい奴らでもない。

しかも、その同盟相手が舐め腐っていた侍達とならばなおさら嫌だろう。

書類をある程度まとめると、神威が呼んでいるとのことのため息をつきながら歩いて行く……

鬼兵隊の艦隊に入り、神威が高杉と遊んでいたのか、壁がボコボコだった。

「……ハア」

ため息をつくると万斉が『請求書でござる』と言って紙を渡してくる。

受け取りたくなかったが、神威の不始末は保護者である阿伏兔の責任でもあるため、仕方なく受け取る。

「……なあにしてんだ団長……」

「団長は阿伏兔だろ〜?」

「そうだなそうだな、団長の仕事も提督の仕事も俺がしてるからなあ〜」

「それでさあ、シンスケ（無視）」

「……………」

拳骨してやろうかと思ったが、楽しそうな神威を見てため息をつく

書類をポケットに入れて神威が一方的に高杉に話しかけているのを見ています…

「阿伏兔殿、今後の擦り合わせを行いたいのですが、よろしいですか？」

武市の言葉に「おう」と返す。

武市と打ち合わせしていると、万斉も途中から参加して来て今後の計画の打ち合わせは順調に終わった。

「打ち合わせしても対して意味ない気がするんだよな…計画通りに行った試しねえし…」

お飾りの神輿を担いでいく話は正直悪くないが、いかんせん上手く行かないのが神威である。

將軍暗殺と言ったら正面切って次期將軍の顔面殴るのは確定事項だ。

それぐらい最近では戦いに出れなくて鬱憤が溜まっている。

「言う事を聞かない師団を始末すれば良いのではないですか？」

武市の言葉に少し考え込む

「…12師団あたりが確かに憂き晴らしになりそうだが…まあ考えてみるわ」

そう言っって手を振って神威の元に行く阿伏兔の背中を万斉は見て

「…余計な提案をしたでござるな、武市」

「そうですか？彼らにはある程度生きてもらわねばなりません、鬱憤ばかり溜まり内から崩壊するのは望まないのです」

「無音からヘビメタに変化したでござるよ、阿伏兔殿」

阿伏兔が真つ直ぐ神威の元に行き、何か二人で話していた。

「阿伏兔殿さえいれば春雨はほとんど我らの手中に収まります。正直、阿伏兔殿の機嫌さえ悪くなければ良いのですから」

「まあ…あの提督殿に比べれば猛犬でござるからな…」

「じゃあね〜シンスケ」

そう言つて二人が出ていったのを見送る。

それから数日後、春雨第12師団が跡形もなく滅ぼされたという事が鬼兵隊の元にもたらされる事になる事を知らず…

将軍暗殺篇『～～より強いとか言われたらめんどくさいことになる』

ー将軍暗殺篇ー

『阿伏兔～！どこにいるの～？』

「団長!？」

「シー!!シー!!」

「ふ、副団長ならトイレだ」

『あ、そう、3秒以内に帰って来なかったら減給って言つといて』

「よー!団長!!」

ひよっこり出ると、神威が殺気放ちながらニコリと笑う。

『阿伏兔どこいつてんの～？人が船から降りてる時にどこ行っちゃったの?』

「こつちも人探してんだけどなあ～見つかんなくて」

『探してる割には艦隊見えないんだけど、どういう事?ねえ阿伏兔、俺がいない間に楽し

いことしてないよな?』

「してないしてない!」

『晋助と一緒に伊賀なんか行つてないよね?』

「行つてない行つてないー!」

『じゃあ、そつちと合流したいから場所教えてよ、俺抜きで面白いことしてたら、どうなるか分かるよね』

モニターをガンガン殴っていた。

「消せー!モニター消せー!」

ブチツと切れたのを見てフウと息を吐く

「良かったのか?」

団員からの言葉に頭を掻きながら

「…あんな傷だらけで獲物求めてた奴連れて来れるかつての、それに…こつちはこつちで面倒なことになるのは明白だしなあ」

服部全蔵が居なくなり、伊賀に向かっている艦隊内に全蔵がいるのは確定事項だが：外に出るとちようど全蔵が艦隊に積んでいたミサイルをダメにしてしまったため、適当に岩場にぶつけて停止する。

近くに銀さん達がいるのを確認する。

「ホンモノの將軍みーつけ」

傘を勢いよく將軍めがけて番傘を投擲すると銀時が颯爽と庇つたのを見る。

部下達の大半が下に向けて行ったのを見送り、頭上からやってきた傀儡忍者達を倒すためにぶん投げた傘の代わりを構え、勢いよく横薙ぎに払う

(ヨイシヨ!!)

周囲に部下がいなければ問題ないので、遠慮なく吹っ飛ばす。

傀儡忍者達を宙に上げ、勢いよく殴り殺して行く

(楽しいねえ〜人がゴミみたいに宙を舞って)

「さてと…」

走って逃げて行く銀さん達を見る

(たまには主要人物を相手にしてもいいか、当分死なねえだろうし…あ、でも坂田銀時は生かしたかないと神威キレルからなあ…)

艦隊から飛び降り、銀時の方に向けて行く

『少なくとも鳳仙よりは強い』



『……!』

『あんまり過ぎた事すれば消される、それだけ頭に入れておきやいい』

(たくつ…嫌になるぜ、あの夜王より強い奴がなんで馬鹿息子の部下なんてやってんだよ、そして、なんで馬鹿息子より先にこつち来てんだよ)

銀時は複数人で掛かって来る夜兔の軍団にもイラついていたが、何より苛立っていたのは、星海坊主から警告されたことだ。

「あくあ、俺たちこつち見えて絶滅危惧種なんだぜ? 丁重に扱って欲しいもんだね」

「……お前は……」

神楽がハツとなり、新八が呟くと

「こちとら將軍の首取ってさつさと仕事終わらしたいんだよ、身内同士でやり合いたくもねえし」

「なんならここは丁重にお帰り願おうか? 叔父さん」

冷や汗を流しながら呟くと阿伏兔は笑い

「誰が叔父さんだ、このすつとこどつこい」

土方と近藤が前に出て、百地が武器を構える

百地が攻撃を仕掛けるが、阿伏兔やその部下達はまるで分かっていたかのように全弾避けてしまう。

「終わりか？今度はこっちの番だぜ」

「つ！！伏せろ！！」

銀時の叫び声と共に一齐に番傘を構えて撃つて来る夜兔軍団。

百地が急いで将軍の守りに回る。

「！引くアルよ！やりたくない仕事ならやらないでヨロシイね！」

「神楽！！」

弾を避け、神楽が突進して行く

「だーかーら、身内同士でやり合いたくねえって言ったろ？」

神楽の拳を避け、いとも容易く気絶させた阿伏兔はハアとため息をつく

足元に転がった神楽を踏むこともせず器用に全員避ける。

「…チャイナは身内だからやらねえと？」

土方の言葉に阿伏兔は「そうだよ？身内だからねえ」と言った次の瞬間、阿伏兔が目の前から消える。

「！！」

「将軍様！！」

新八の声が響き渡る。

「…やっぱ、すげえ反射神経だな、お前さん」

將軍めがけて傘が振り下ろされそうになっているのを全力で止めていた銀時

「だから……！ テメエらの相手はしたくねえんだよ……！ 誰が好き好んで夜王並みの攻撃も  
う一回体験しなきゃなんねえの！」

一撃を食らっただけで左手首の骨が折れる。

「万事屋!!」

「！」

阿伏兔めがけて土方が剣を放つ

態勢を立て直し、部下達の前に戻る阿伏兔

「走れ!!」

「!!!」

新八と將軍が走って逃げて行くのを黙って見送っていた阿伏兔

「追わなくて良いのか？」

団員からの言葉に阿伏兔は「あの馬鹿団長から撤退だつてよ、やれやれ、もう一撃打  
てたら良かったんだがなあ」と言つて部下達と共に後退して行く

## 第15話『敵キャラが努力したら物語が破綻する』

―原作時間軸《阿呆提督時代》―

原作に突入したものの、第七師団にはかなりの問題がある。

それは圧倒的戦死者の数だ。

(モブだから減らしても増やせば良いだけみたいな扱いなんだろうけど…)

前なんかであった『真選組の隊士減ってませんけど』みたいなハガキ来ていたのを思い出す

「…戦力強化の前にあのバカ団長がやらかすからなあ…」

賢い上司の手本はブラック●グリーンとかそう言ったマフィアモノの見て学んだが…

(…いかんせん、頭に血が上る部下が多すぎて、育たない…世の上司はこんなキツイのか)

と思いつながらテーブルに突っ伏していた。

(…でも、なんで鳳仙の旦那の時は割と強い人材育ったんだ…？え？俺の所為？これ？)

一人で悶々と悩んでいると…

「阿伏兔、吉原から書類が来てるが…」

「云業から手紙を渡されて開く」

「……………」

「なんて書いてあるんだ？」

「その問いかけにハアとため息をつく」

「…第10師団の団員からの手紙だよ」

「あそこから？」

第10師団の団員は夜兔達と違い個人個人が強いわけではなく、武器に関してのみ才能のある傭兵集団だ。

平たく言えば技術面が凄いだけで戦闘面に関しては夜兔よりはるかに劣っている。

「吉原で悪さをして、その結果、吉原の人間から嫌がらせを受けたと…」

「監督行き渡っていないのはどう取るみたいな難癖つけて来たぞ」

「…あの阿呆提督、体よく始末する気満々じゃねえか」

「で？とうするんだ？」

「その問いかけに少しだけ考えるが」

「まあ、俺たちが助けに行くほど地球人はヤワじゃねえ、下手にほったらかしにしても百華に潰されるのは明白だろ」

そう言っつて書類をぶん投げると

「それがな…阿伏兔、かなりの人数で吉原を支配下に置こうとしてる奴らが多いんだ…」  
話を聞くには野放し状態の春雨第七師団に代わり、地球に少しでも根城を築きたい第10師団は全力で奪いに来ているらしい。

「…つまり、ほったらかしにしてたらそれはそれはそれで上が突いて来て…かと言っつて変に滅亡させると上の人間は厄介なことをしてくる…か、あ…あの阿呆提督殺しているか?」

「苛立つのも分かるが、まだ殺し時じゃないんだろう?」

「…まあな」

後々阿呆提督から馬鹿提督に変わる際に少しでも、支配下に入れられ師団を増やさねばならない。

「阿伏兔ー!!暇!!」

そう叫んで部屋に入ってくる神威を見て閃く

吉原にやってきた阿伏兎と神威

他の団員は地球人の女性を壊さないという契約の元、自由にしてもらうことにした。

「部下達への労い？珍しいじゃん」

「どっかの誰かが、部下に有給休暇とか取らせてやらねえからなあ」

「だって、休みつて言ってもどっちにしる艦隊にいて訓練するだけじゃん」

「女がいる場所に連れて行くのも欲求不満の解消になるからいいんだよ、あんなむさ苦しい環境にいて野郎共に囲まれて見ろよ、ホモやらなんやら発生するんだよ」

「…それはやだなあ…」

「そんな中で女性に似てる見た目の団長が襲われる様子なんざ見たかねえし」

「あははは、その時は殺さないかね」

二人で話しながら進んでいると、案の定、春雨第10師団の複数の団員たちが百華が揉めていた。

「案の定揉めてるね、助けてあげるの？」

「あの団員達は放っておく、何もしなくても侍が倒してくれんだろ」

そう言つて見ると、案の定、銀時達が彼らをぶちのめしていた。

「わー、あのお侍さんだ」

そう言つて嬉しそうにする神威を見て「ストップストップ」と言う

「なんで」

不満そうに言う神威に「もう少しだけ辛抱してろ」と言う。

二人で屋根の上に登り、眺めていると、流石主人公強いのかバツバツサと倒して行っていた。

「第10師団をぶちのめした後の侍達を追い詰めるってこと…そんなめんどくさいことしなきゃならんの？」

神威はため息をつきながら眼下の侍達を見ていた。

「大人の社会つつうのはしがらみが多いからなあ、殴ってハイ終わりってワケにはいかねえしな」

阿伏兔は神威の傍らに向かう

「全員まとめてぶん殴って始末すればいいじゃん。上の人間もそれで納得するんじゃないの？」

「あんな貧弱な奴らと戦ったって楽しくねえだろ？あの侍をぶちのめした方がよほど楽しいに決まってる」

「そりゃそうだね」

二人で見ていると、ある程度終わったのか神威が立ち上がる

「じゃ、行ってくるね」



そう言つて手を振つて屋根の上から降りて行く

降りて数分後、神威と銀時が戦っているのを他所に路地に降り立つ

銀時達が戦っている戦闘音を聞きながら番傘を差して歩いて行く

「…夜兔の軍隊にも武器があればいいんだがなあ」

そう呟きながら第10師団団長が路地裏に逃げたのを確認し、探し歩く。

「くそっ!!」

阿伏兔に向けて拳銃を打ってくる。

銃弾をキャッチしてそのまま投げ返すと、足に命中した。

あまりの痛みに第10師団団長が悶絶した。

その前に座ると

「俺は拷問なんざ趣味じゃねえが、こっちは年がら年中、上からの命令で人員が減つてるんだよ。それでオタクの最新武器やら治療器具を融通して欲しいんだよね」

「な、なら…!」

命乞いをする第10師団団長を見て笑う。

「機械や器具が必要なだけであつて、お前らは別に必要じゃねえんだわ」

「なっ…!」

「上手い具合に争いを引き起こしてくれたおかげだから感謝してはいるがなあ?」

そう言って笑う阿伏兔を見て震えが止まらない師団長を噛い  
「ドンマイ」

神威は銀時と戯れた後、手を挙げて「お腹空いたから場所案内してくんない？」と言  
い、適当な部屋に案内される。

「お前…ホント、何がしたいの？」

銀時の言葉に「運動がてら食事に来た」と言う

「傍迷惑すぎるんだよ…お前」

そう言われつつも食べ始めていくと、ある程度食べ終わって満足したのか、神威は元  
気に「ご馳走様」と言って多めにお金を出して玄関に向かった。

「お金、多いけど」

日輪の言葉に神威は笑顔で答えた。

「良いよ良いよ、それ修繕費かなんかに使って」

「修繕？」

神威が血の匂いを頼りに部屋に行く

「阿伏兔、拷問好きだっけ？」

中には返り血だらけの阿伏兔がいた。

殺気でぎらついている阿伏兔のそばに座る。

「ん？効率良くねえから好きじゃねえよ？」

そう言つて返り血まみれの服を洗っている阿伏兔に

「じゃあ何で拷問したワケ？」

そう言つて笑いかける。

「利率のいい保険だよ」

「保険？」

隣に座つてジュースを飲む

「ふーん。まあ、お前が言うんだからなんとかなるんでしょ」

「そりゃーね」

それから春雨に帰還したが、第10師団は壊滅する事なく第七師団と仲の良い師団になった。

# END『エンドロールのない人生』

—  
—  
—  
—  
—  
—

虚との戦いが終わり、物語はエンディングを迎えた。

自分より年老いて行く彼らを見て少しだけしんどくなっただけの内緒の話だ。

「阿伏兔より歳上になっただけなあく俺も」

「背丈だけはな」

神威も良い歳になり、結婚相手も見つけて平穏な生活を送っていた。

第七師団はもう引退し、地球で生活する事になったのだが…

(∵地球のアルタナでも生きられる性能とか求めてねえ∵)

自分は江華のようなタイプではなく、どちらかというと虚のように他の星のアルタナに少しだけ耐性がつくようなタイプらしい。

(心臓に別の星のアルタナをモロに食らっても即死しないタイプ)

まあ、とは言ってもそんな数千年単位で長生き出来る程の性能でもないが

「にしてもお前さんが子供を作るなんてなあ、あの頃の団長に見せたら笑いながら殺しに来るだろうな」

そう言うのと神威は笑いながら隣を座る

「あのさあ、阿伏兔」

「なんだ？」

「ありがとうネ」

「……ハイ？」

「豆鉄砲を食らったような顔になる。」

「……そんな驚いた顔しなくても良いだろ……」

「いやいや、お前さんが人にお礼を言うなんて……明日には虚復活か？」

「今それになったら洒落にならないからやめて、お前には負けるけど、俺もそこそこの年になつてある程度周り見えるようになったからさ、一応礼は言つておこうかなつて」

「一応……ね」

ジト目で見ると笑つて来る神威

「俺も母さんのおかげで長生きの分類には入れて、お前がメソメソするの見なくて済むのも嬉しくてさ」

「メソメソなんてしねーけど?！」

そう叫ぶ阿伏兔に苦笑いする神威

「阿伏兔はさ、将来どういう最期迎えたいの？」

「…は？」

神威は微笑みながらそう問いかけて来る。

「俺たちの死んだ後の話だから地球破壊しても構わないケド」

「…めんどくせえからしねえ」

「えー？ 阿伏兔のことだから簡単そうに見えたけど」

そうヘラヘラ笑う神威に無言になる。

「……………」

「アルタナの不死者ってこの星にある漫画に出てくる不老不死より幸せだと思うよ」

神威はそう言って漫画雑誌を渡してくる

（…またなんつーもんを…）

「…幸せかどうかはしらねえな…」

そう呟くと神威は「それもそうだけど」と言い、漫画雑誌のとあるページを見せる  
「生きる意味を見出せずに虚みたいにならないように、俺から最後のお願ひ?！」

神威は若い頃のように笑い

「俺の子供や孫達もよろしくね」

「ねー、あぶとー、あぶとつて何歳？」

「100 辺りから数えてねーな」

「じゃあ、ふじみのカミサマだあ〜」

「…なんだその頭の悪い答え…てか、不死身つて言葉誰から聞いた？」

少年は笑い、阿伏兔の膝にダイブする。

「ひーひーおじいちゃんから」

「…やっぱり、あの馬鹿隠す気ねえじゃねえか…」

少年は足をパタパタさせながら楽しそうに阿伏兔の方に絵本を見せる

「ふろーふしつてしあわせ？」

あの馬鹿に似た瞳で、江華に似た見た目でそう言つて来る。

「……………幸せだな」

頭をぐりぐり撫でながら言つと「うわー」と言つ少年

「時も経てばこの街も随分様変わりするのを見ていられるしな」

青い空に向けてそう呟く